

ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著

『ドイツ昔話集』<sup>メルヒェン</sup>（一八五七）試訳（その三）

鈴木満訳・注・解題

お断り

編著者ルートヴィヒ・ベヒシュタインに関しては、鈴木満訳・注・解題「ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ昔話集』<sup>メルヒェン</sup>（一八五七）試訳（その一）」<sup>①</sup>（『人文学会雑誌』第四〇巻第四号、二〇〇九・三月）の「まえがき」を<sup>②</sup>参照ください。

なお、目下のところ底本としては

ヴァルター・シエルフ<sup>①</sup>の注とあとがき付きで、ルートヴィヒ・リヒターの二八七葉の挿絵が入った下記

Ludwig Bechstein: *Sämtliche Märchen*. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. Darmstadt 1972.

と共に

ハンス・ライエルク・ウター<sup>②</sup>編の下記

Ludwig Bechstein: *Märchenbuch*. Nach der Ausgabe von 1857, textkritisch revidiert und durch Register

erschlossen. Herausgegeben von Hans-Jörg Uther. Eugen Diederichs Verlag, München 1997.  
をも用いている。

後者は *Ludwig Bechstein Märchen* として二巻本。第一巻が DMB (一八五七)。ただし挿絵は一切無い。第二巻は NDMB。「世界の民話」*Die Märchen der Weltliteratur* (略称 MdW) シリーズの一つである。共に簡単な古語、方言などドイツ語圏の一般読者にとって難解な語彙一覧が、収録された昔話番号別に付いている。シエルフ注釈テキストには稀ながら存在した誤植が、こちらでは訂正されている。MdWの方針に従い、全ての昔話メルヘンの注中に AT 番号とそのタイトル (AT の英語タイトルではなくドイツ語で) が必ず示されている。更に、全ての昔話メルヘンに番号が付されている。

ただし、注自体はシエルフ注釈テキストの方が遥かに詳細なので、両テキストを相互に補完させるのがよろしかろう。

ちなみに訳文中の「」内、その他の部分の〔〕内は訳者の補足である。

#### 訳注・解題略記号凡例

- AT アンティ・アールネ／ステイス・トンプソン編著『民話の語型』 Antti Arne / Stith Thompson: *The Types of the Folktales*. Suomalainen Tiedakatemia. Academia scientiarum Fennica. Helsinki 1964.
- ATU ハンスロイエルク・ウター著『国際的民話の語型』 Hans-Jörg Uther: *The Types of International Folktales. A Classification and Bibliography*. 3 Vols. Academia scientiarum Fennica. Helsinki 2004. AT の増補改訂版。
- BP ヨハンネス・ボルテ／ゲオルク・ポリーフカ編著『KH M 注釈』 Herausgegeben von Johannes Bolte / Georg Polivka. *Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm*. 5 Bde. Georg Olms Verlagshandlung. Hildesheim 1963.
- DMB (一八四五) ルートヴィヒ・スベニェウタイン編著『ドイツ昔話集』 Ludwig Bechstein: *Deutsches Märchenbuch* (1845).

- DMB** (一八五七) ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ昔話集』 Ludwig Bechstein: *Deutsches Märchenbuch* (1857).
- DS** グリム兄弟編著『ドイツ伝説集』 Brüder Grimm: *Deutsche Sagen*. 第一卷(一八二六)。第二卷(一八一八)。
- EM** クルト・ランケ創始／ロルフ・ヴィルヘルム・ブレードニヒ編『昔話百科事典』 Begründet von Kurt Ranke. Herausgegeben von Rolf Wilhelm Brednich zusammen mit Hermann Bausinger: *Enzyklopädie des Märchens: Handwörterbuch zur historischen und vergleichenden Erzählforschung*. Walter de Gruyter. Berlin [ua] 1977.
- HdA** ハンス・スピトルト＝シュトロイプリ編『ドイツ俗信事典』 Herausgegeben von Hanns Bächtold-Sträubli: *Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens*. 10 Bde. Walter de Gruyter. Berlin / New York 1987.
- HdM** 『ドイツ昔話便覧』 *Handbuch des deutschen Märchens*. 1) のうち2巻のみが一九四〇年までに刊行された。EMの前身。
- KHM** グリム兄弟編著『子どもと家庭のための昔話集』 *Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm*. 初版第一部(一八二二)・第二部(一八二五)。決定(第七)版(一八五七)。
- MdW** 「世界の民話」 *Die Märchen der Weltliteratur*. Begründet von Friedrich von der Leyen. Herausgegeben von Kurt Schier und Felix Karlinger. Eugen Diederichs Verlag. Düsseldorf-Köln.
- NDMB** (一八五六) ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『新ドイツ昔話集』 Ludwig Bechstein: *Neues deutsches Märchenbuch* (1856).
- VdD** ヨーハン・カール・アウグスト・ムゼーウス著『ドイツ人の民話』(一七八二―八六) Johann Karl August Musäus: *Volksmärchen der Deutschen*. 5 Teile.

## 二二三 べっぴんさんの花嫁御寮

昔むかし、可愛らしい田舎娘が、飼っている牝牛の餌を集めに森に入った。何の懸念もなくのんびり草を刈っていたところ、突然四人の盗賊が現れ、この子を取り囲み、情け容赦もあらばこそ、むりやり一緒に連れ去った。娘は思うさま叫び、もがき、哀訴嘆願したんだけどね。

盗賊たちは少女のふるさとから遠く離れた小暗い森の中に家を一軒持つていて、ここに屯たぢろしていた。連中が略奪に出かけるときは、いつも少なくとも何人かが留守番役で残る。さて、盗賊たちは、ふるさとから攫さらつて来たことは別として、それ以上娘に危害は加えなかった。彼女は煮炊き、洗濯といったいろんな家事をやらなければならなかった。それ以外はまずまあ安楽な暮らしだったが、いつも嚴重に見張られていた。ところで盗賊たちはこの子に、べっぴんさんの花嫁御寮、と名前を付けたのさ。

さて、こんな具合に娘はもう何年か盗賊の棲処すまかで過ご



していたところ、ある時大きな仕事やまが企まれ、こいつをうまくやり遂げたければ、一味徒党が総勢で掛からなくっちゃならない、というしだいになった。

娘は盗賊の巢窟での暮らしにどうやらすっかり馴染んだ様子で、これまでついぞ逃げ出そうとしたこともなかったし、実際の話、人の住まない森を抜ける道を見つけるのは難しくもあるし——そう首領は考えた——今回は一人きり、見張り無しで森の家に残されることになった。でも、盗賊たちがいなくなった途端、べっぴんさんの花嫁御寮は、どうしたら見咎められずに逃げ出せるか、思案に耽った。急いで藁人形を拵こしらえ、日頃着ていた服を着せ、被っていた頭巾を被らせた。自分はどうと、頭のとっぺんから足の先まで蜂蜜を塗りたくり、それから「羽根布団の中身の」羽根の中をごろごろ転げ回ったので、どこのだれやら皆目分からなくなってしまうと、奇妙きてれ奇天烈な鳥みたいに見えた。元の衣装を纏った人形は玄関の上の窓の一つに寄せ掛け、外を覗かせた。もつとも顔は隠しておいたけど、それが済むと雲を霞と一目散。

娘が逃亡を計画しているんじゃないか、と首領がふつと思いついたのか、それとも何か忘れ物でもあったのか、いや、とにかくね、やつこさん、手下の盗賊を数人家へ帰したもの。てなわけで、羽根の生えたへんてこりんはこいつらに途中でばったり出くわしちまった。でも、盗賊たちは、これはだれだか見分けがつかないが仲間の一人だ、と思いい込み、げらげら笑って、こう問い掛けた。

「どけ行く、どけ行く、羽根袋どん、

べっぴんさんの花嫁御寮はいったい何をしていざるさ」。

まさにそのご当人のこちらはびっくり仰天したけれど、勇気を奮い起こし、作り声でこう返辞。

「あの子はうち中掃除して、

窓から外を眺めているでしょ<sup>(4)</sup>」。

こうして盗賊たちの目を紛らわせ、うまく森から抜け出しもして、娘はとある村に辿りつき、着る物を買ひ、風呂にも入った。それから長旅をしたあげくだったけれど、無事息災でふるさとに戻った。それに、盗賊の棲処にあった飛び切り上等の品物を、置いてきぼりにしたりしないでお給金代わりに戴いて来たから、裕福な暮らしもできたし、やがて頼もしい若者と結婚した。

例の盗賊たちだけどね、家が目に入ると、べっぴんさんの花嫁御寮の姿が窓際に見えたから、もう遠くから挨拶してこう叫んだもの。

「やあ、ごきげんよう、べっぴんさんの花嫁御寮、

嬉しそにおらうちを眺めてるだな<sup>(5)</sup>」。

でも挨拶に何のお返しもなかったので、盗賊たちは怪訝<sup>けげん</sup>に思った。もっと近寄ると、べっぴんさんの花嫁御寮が眠っているんじゃないか、と考えた。大声を挙げたけれど、その甲斐もなく、娘は目を覚まさない。戸を開ける、と言いつけたけれど、その甲斐もない。どんなにどんどん叩いても、どんなにながっても、どんなに叫んだり罵ったりし

ても無駄。とどのつまり、かんかんになって扉をぶち壊し、階段をどつと駆け上がり、べっぴんさんの花嫁御寮をむんずと捉まえたが、腕に抱いたは藁人形。そこで盗賊たち慨嘆しきり。

「あばよ、道中ご無事でな、べっぴんさんの花嫁御寮、女を信用するやつはとんちき間抜けもいとことさ」<sup>(6)</sup>。

解題

原題 *Die schöne junge Braut.*

KHM四六「フィッチャーの鳥」Fitchers Vogel（金田訳「まっしろ白鳥」）は「青髭」の類話だが、魔法使いフィッツェ・フィッチャー Frize Ficher の家からこっした恰好で逃げ出した花嫁は、途中で行き逢った当の花婿をもうまうまこまかす。

## 二四 七羽の鴉

世の中には不思議なことがとってもたくさんあるものだけど、昔むかし、ある貧しい女が一度に七人男の子を産んだのさ。ぼうずたちは皆元気ですくすく育った。女は何年か経つとまた女の子を一人授かった。ご亭主はすこぶる働き者で、せつせと仕事に精を出したので、職人が入り用な人たちは喜んで雇ってくれた。そこで大人数の一家をまともに養えたばかりでなく、倏つましく所帯を切り回したお蔭で健気けんげなおかみさんが万一に備えての貯えも残せるほどの稼ぎもあつた。けれどもこの実直な父親は働き盛りの歳で死んでしまい、可哀そうな後家さんはすぐに切羽詰ってしまった。だって、彼女には、八人の子どもを食べさせることができるといふほどの実入りはなかつたからね。かてて加えて七人の少年たちはどんどん大きくなり、ますますたくさんのものが必要になつた。その上母親の最大の悲しみの種は連中が腕白になる一方だつたこと、いやそれどころか、乱暴者のろくでなしになつてしまつたことだつた。哀れな女は自分を苦しめ悩ますもろもろのことに我慢も尽きてしまいそう。それでもなんとか子どもたちを善良実直に躰しづけようとしたが、硬軟いづれの手段も実を結ばず、男の子たちの心は頑かたくなまま。そういうしだいである日のこと、とうとう堪忍袋の緒がぷつり切れ、こう言つたのだ。「ああ、この性悪の鴉こそうども、おまえたち、七羽の真つ黒けな鴉になつて、飛んでつちまえばいい。あたしが二度と再び顔を見ないで済むように」。するとすぐさま七人の男の子たちは鴉になつて、窓から外へ飛んで行き、姿を消した。

さてそれからというもの、母親は一人きりの女の子とともにまことに平穩無事な暮らしを送りもし、入り用以上に稼ぎもした。そして女の子は可愛らしい、氣立てが好く淑やかな乙女に成長した。でもまあ何年か過ぎると母親も娘も七人の兄弟たちに逢いたくつて逢いたくつて堪らなくなつた。そうしてよく彼らのことを話題にし、あの子たちが





帰って来てくれたらねえ、りっぱな若者になっていればねえ、あたしたち、働いて良い暮らし向きになって、お互い  
とつても楽しくやれるだろうに、と話しては泣くのだった。少女の胸にはこうして兄さんたちに焦がれる気持ちがま  
すます膨れ上がったので、ある時母親にこう切り出した。「母さん、あたしを旅に出してくださいな。そしてお兄  
ちゃんたちを探させて。そうすりゃあたし、お兄ちゃんたちを悪い道から引き戻して、母さんにお渡しします。お歳を  
取ってからのお誉れと歓びのもとになるようにね」。母親の返辞。「おまえってほんとに好い子だね。そういう殊勝なこ  
とをやつてのけようつてのを、あたしにや止められないし、止めるつもりもない。旅に出るがいいよ。神様のご加護

がありますように」。そう言うと、娘にちいちゃな黄金の  
指環を渡した。これは兄たちが鴉に変身させられた時、女  
の子が指に嵌めていたものだった。

乙女はすぐさま仕度を調べ、旅に出た。いやもうほんと  
に遠くのとおくまで彷徨さまよったけれど、長いこと兄さんたち  
の消息は一向分からなかった。でもやがてとあるとても高  
い山の麓にやってきました。その頂には一軒のちっぽけな小屋  
があった。娘は下で座り込んで休み、物思いに耽りながら  
小屋を見上げた。これは鳥の巣のように見えもした。砂利  
と粘土を捏ねね合わせて作ったみたいに灰色だったから。ま  
た、人間の住まいのようにも思われた。お兄ちゃんたちは  
上のあそこに住んでるんじゃないかしら、と乙女は考えた。

とどのつまり、その小屋から七羽の黒い鴉が飛び出すのを見届けましたので、この推量は更に強まった。で、山に登ろうと喜び勇んで出発したものの、山頂へと辿る道は奇妙な、鏡のようにつるつるする石が敷き詰められていて、大骨折ほねって少し登るたんびに、つるりと滑ってまた下に転げ落ちるのだった。そこで娘はがっかりして、どうしたら攀よじ登れるか途方に暮れた。その時一羽の白い雁がんを見掛けたので、こう思案したもの。おまえの羽根があたしにあれば、すぐに上へ行けるんじゃないかな、って。それからこうも考えた。あの鳥の羽根を切り取れないかな。そうよね、したら助かるわ、って。そこで綺麗な雁を捕まえると、羽根とそれから脚も切り取って、これを体に縫い付けた。そしてね、試しに飛んでみると、とっても見事に、軽々と、上手にできたんだよ。飛ぶのに疲れると、雁の脚でいくらか歩いた。それでも二度と滑ったりしなかった。こうして乙女はさっさとしかも安楽に、長いこと行きたくて堪らなかった目的地へやって来た。頂上に着くと、小屋の中に入った。でも、この小屋、ほんとに小さかった。中にはちっぽけな小机が七つ、小椅子が七つ、小寝台が七つあった。部屋には七つの小窓が付いていて、煖炉だんろの中には小皿が七枚置いてあり、その上に炙あぶった小鳥と鳥の卵を茹ゆでたのが載のっていた。<sup>(8)</sup> 好い子の妹は長旅でくたびれていたの、ちゃんと体を休めることができるのを喜んだ。それにお腹も空いていた。そこで七枚のお皿を煖炉から出し、それぞれからちよつとづつ食べ、それぞれの椅子にちよつとづつ座り、それぞれの寝台にちよつとづつ横になり、最後の寝台で寝入ってしまった、七人の兄さんたちが帰って来るまでそこをずうっと動かなかった。兄さんたちは七つの窓から部屋に飛んで入って来、めいめいのお皿を煖炉から出し、食べようとしたが、それがもう食べかけなのに気が付いた。さてそれから横になって寝ようとしたところ、寝具が乱れているのが分かった。そのうち兄弟の一人が大声を挙げてこう叫んだ。「あれまあ、娘っ子がぼくの寝台で寝ているぞ」。他の兄弟たちは急いでそこへ駆け寄ると、すやすや眠っている乙女をびっくり仰天して見つめた。そして代わるがわる「これがぼくらの妹だったらなあ」と言ったが、ま



たまた代わるがわるこう叫んだ。「そうさ、そうだよ、これはほくらのちいさな妹さ。あの子はこんな髪をしてたし、こんなちいさな唇だった。それに、今一番ちっちゃい指に嵌めてるこんなちっちゃい指環を、あの頃一番大きな指に嵌めてたじゃないか」。そうして皆歓声を挙げ、だれもかれもちいさな妹に接吻くちづけした。でもこちらはぐっすり寝込んでいたので、なかなか目を覚まそうとしなかった。

とうとう乙女がお目を開けると、七羽の真っ黒けな兄さんたちが自分が寝ている寝台の周りに留まっているのを見た。そこで妹が言うことには「まあまあ、逢えてほんとに嬉しいわ、お兄ちゃんたち。ようやくと見つけれられたのは神様のお恵みのお蔭だわ。お兄ちゃんたちを探すため、長くて辛い旅をしたの。そうして掛けられた呪いから連れ戻そう、つて思ったの。ええ、ええ、今後もう母さんを怒らせたりしないで、あたしたちと一緒にせつせと働いて、母さんがお歳を取ってからの誉れと歓びのものになろう、っていう気ならね」。妹がこう話している間兄弟はわんわん泣いたが、それからこう言った。「そうとも、優しい妹、

ほくたち改心するよ。そして二度と再び母さんを苦しめたりはしない。ああ、鴉になってからというもの、ほくたち、惨めな暮らしを送ってるんだ。この小屋を作る前は、飢えと寒さで今にも死にそうだったことがよくあった。その上後悔が夜も昼もほくたちを苛さいなんだもの。だつてね、ほくたち、処刑された哀れな罪びとの死骸を喰わなきゃならなかったんだ。<sup>(9)</sup> そのせいで罪びとの無惨な最期がいやおうなく身に沁みだのさ」。

妹は、兄さんたちがとうに悔い改めていて、いかにも殊勝な心柄でこう語ったので、嬉し泣きをし、こう叫んだ。「ああ、これでもかかもめでたしだわ。お兄ちゃんたちがおうちに帰り、母さんがお兄ちゃんたちの改心したことを聞いたら、心の底から許してくれて、また人間に戻してくれるでしょ」。

さて、兄弟がちいさな妹とふるさとへ旅立とうとした時、木の小箱を開けながらまずこう言った。「いとしい妹、ここに幾つもある綺麗な黄金の指環ときらきら輝く寶石をお取り。みんなほくたちが外でだんだんに見つけたものなんだよ。そしておまえの前掛けに入れてうちへ運んでおくれ。なにしろこれがあればほくたち、人間になっても金持ちでいられるもの。鴉のほくたちはこれが綺麗に光るから集めただけだよ」。

ちいさな妹は兄さんたちの言う通りにし、自分でもそうした綺麗な装身具を嬉しがった。ふるさとへの道中、鴉の兄さんたちは代わるがわるちいさな妹を乗せて飛び、やがて母親の住まいに着いた。住まいに着くと、窓から飛び込んで、母親に許してくれるよう懇願し、これからは好い子でいる、と誓った。妹も一緒になって哀訴嘆願の口添えをした。母親は嬉しいやらいとしいやらで胸が一杯になり、七人の息子たちを許してやった。そこで皆また元の人間に戻ったが、いづれ劣らず背が高く優雅な、まことに器量のよろしい、花も盛りの若者だった。一同はありがたくなって堪らず、善良な母親と優しい妹を抱き締め、接吻した。その後間もなく七人兄弟は七人のうら若く淑やかな女性を娶めとり、大きく素晴らしい家を建てた。ほら、あの装身具類を売ってどっさりお金を手に入れてたんでね。新居の最初の

奉献式<sup>(10)</sup>は兄弟七人合同のご婚礼だったんだ。

それから妹もりっぱな男と結婚した。もつとも兄さんたちがやいのやいのとせがんだので、それからもずうつと皆  
のところで暮らさなきゃならなかったけど。

こういっしだいでそれからも善良な母親は子どもたちのお蔭で楽しく世を送り、老年に至るまで愛情籠めてか  
しずかれ、恭しく孝行してもらったのだった。

解題

原題 *Die sieben Raben.*

## 二五 婚礼の客お三方

昔むかしのことだけど、ある村の百姓屋敷に飼われている犬が三匹(三)いてな、お互い仲良く近所付き合いをしておった。で、あるお百姓の家で豪勢な婚礼が挙げられることになったげな。これには老いも若きも招待され、鍋でことごと煮たり、竈(かまど)でこんがり焼いたり、ぐつぐつ茹(ゆ)つたり、じりじり炙(あぶ)つたりで、村中に旨そうな匂いが漂った。三匹の犬は寄り集まって、この芳香をくんくん嗅ぎ、自分たちも婚礼に出掛けたいもの、そして何か手に入らないか、試してみたい、と相談。だけど、無用に人目を引くのは避けたい、三匹一緒に同時にじゃなくって、一匹づつ、次に行こうや、と衆議一決した。

一番目は家畜の解体小屋に入り込み、大きな肉切れを急いでばつくりやらかし、とつと逃げ出そうとしたが、とつ捉まっていたかにおちのめされ、くわえていた肉をひたたくられた。

こうして腹を空かせたまま、打ち身を負って百姓屋敷のお隣さん連のところへ引き揚げて来ると、好い報(しら)せに飢(かつ)えていたこちらは、「さて、それでいっただうだった、どんなあんばいだったかね」と訊いたもの。でも、ふるまわれた婚礼のご馳走はすぐ塩(しよ)辛い棍棒肉汁(ネツ)だった、と本当のことを白状するのは恥ずかしかった犬は「たっぷり戴いたよ。だけどあそこじゃすこいもんでなあ、固いのや柔らかいのを喰らわにゃならん」と答えた。

これを聞いた仲間たちは、婚礼では皆がどんがらがっちゃと飲み食いしていて、固いのやら柔らかいといった肉や骨などの美味しい余り物が落っこつてるんだ、と思ひ込んだ。そこで二番目の犬が全速力で婚礼をやっている家へすつ飛んで行き、うまく台所に潜り込んで、見つかったものをせしめた。——ところが帰り道が見つかからないでいるうちに見咎められてしまい、深鍋一杯の煮えくり返った熱湯を背中にぶつ掛けられたので、そこから飛び出した時には、



水から上がった形犬むぐいぬみたいに、もうもうと湯気を立てていた。でも、火傷がおっそろしく痛かったので、歯を食いしばって堪こらえたもの。さて、二匹の仲間が待ち受けている農場に戻ると、すぐに「さて、それでどんなあんばいだったかね」と訊かれた。「たっぷり戴いたよ」が返辞。「だけどあそこじゃ熱あついのなんの、冷たいのや熱いのを喰らわにゃならん」。

そこで三匹目の犬は考えた。こりゃあ、婚礼のお客たちはご馳走に掛かり切りで、冷たい食べ物や熱い食べ物代わるがわるお目見えするんだな、食いっぱぐれたくないもんだ、少なくとも、さくさく、ぼろぼろぼろしたお菓子デザートが出されるお食後には間に合わなくっちゃ、とね。できる限り急いで行ってみたが、家に入った途端、だれかがとつ捉まえ、部屋の扉の間に尻尾をぎゅっと挟み込み、くたくた、ぼろぼろに打ちめしたので、とうとう尻尾の皮が剥がれ落ちた犬は、大恥かいて遁走した。

「さて、それであんた、婚礼じゃあどんなあんばいだった」と友だち連が訊ねた。めいめい心中にたにたしながらね。罰を受けた犬は、皮の剥げた尻尾を目に留まらないように両脚の間に挟み、何事もなかったふりをしていわく「たっぷり戴いたよ。ほん

とにすこ<sup>(15)</sup>かったな。随分たくさんぼろぼろにありついた。だがの、毛を置いて来にや「手痛い目に遭わにや」ならんかった」。

さて、それから長いこと、三匹の犬は、婚礼の肉汁<sup>スープ</sup>が、婚礼の掛け汁<sup>ブリュウエ</sup>が、婚礼のお菓子が、自分にどんな味がしたか、てんでにとっくり思い返した。三匹とも炙り肉の匂いだけは思う存分嗅<sup>か</sup>いだんだけどなあ。

解題

原題 Die drei Hochzeitsgäste.

これはもちろん笑い話。現代日本人の感覚にはいささか残酷かつ粗野過ぎようが。



二六 涙の小壺



昔むかし、母親と子どもがいた。母親はたった一人のこの子を心底愛しており、この子なしには生きていられなかった。しかし主は大いなる病を送りたまうた。

病気は子どもたちの間に蔓延して猛威をふるい、この子にも取り憑いたので、子どもはどつと寝込んでしまい、治る見込みはなくなった。三日三晩というもの母親は愛児の傍らで眠ることなく泣いてお祈りをし続けたが、子どもは亡くなった。この世で独りつきりになった母親は、強烈で言いようの無い苦悩に苛まれ、飲みも食べもしないで泣いた。またもや三日三晩ひっきりなしに泣き通し、子どもの名を呼び続けた。三夜目、こうして深い懊悩に閉ざされて座り、子どもが死んだ場所で泣き濡れ、氣を失わんばかりに苦しみに茫然としてみると、扉が音もなく開いた。母親はぎよつとした。目の前に立っていたのは死んだわが子だったから。子どもは至福の小天使になっていて、

無垢むくそのものように甘い微笑みを浮かべ、御変容ごへんようのキリストのように麗うつくしかった。<sup>(17)</sup>けれどもちいかな手に小壺を持っており、これが今にも溢れそう。そして子どもはこう言った。「ねえ、お母ちゃま、もうぼくのこと泣かないで。ほらね、この壺の中のはお母ちゃまの涙なの。ぼくを思って流したね。悲しみの天使がそれを集めてこの壺に入れたんだ。お母ちゃまがもう一滴でもぼくのこと涙を流したら、この小壺は溢れちゃうでしょ。そしたらぼくはお墓の中で休めないし、天国に救われないの。だからね、お母ちゃま、もうぼくのこと泣かないで。だって、ぼくは天に召されて、幸せで、天使が遊び相手なんだから」。死んだ子どもはこう言って姿を消した。それからというもの、母親は、子どものお墓での安息と天国での浄福を妨げないように、少しも涙を流さなかった。

#### 解題

原題 *Das Tränenbrüchlein*

KHM一〇九「経かたびら(屍し衣)」*Das Totenhendchen*のように、母親の涙で子どもの(死者に着せて埋葬する長くて白い)屍衣が濡れるので子どもが安らげない、とか、ここでのように、もうすぐ溢れそうな涙の小壺とか、柩ひつぎの中がそのつど血で一杯になるので、これ以上自分を悼んで泣かないで、と頼む死者についての伝説がある。ペヒシュタイン在世当時、こうした伝説は民間に口承されていたばかりか、頻繁に文学の素材とされて広まっていた。たとえば、アーデルベルト・フォン・シャミッソンの「母と子」(一八三〇) Adelbert von Chamisso: *Die Mutter und das Kind* (83)。

二七 雌鷄めんどりちゃんおんどりと雄鷄おんどりちゃんの話

昔むかしのその昔、雌鷄ちゃんめんどりちゃんと雄鷄ちゃんおんどりちゃんがおりました。一緒に胡桃山くるみに出掛けてね、胡桃の実⑬を探したの。雄鷄ちゃんめんどりちゃんが雌鷄ちゃんめんどりちゃんに言うことにや「きみが胡桃を見つけたら、ひとりで食べたりしないでさ、ぼくに半分くれなぐちや。でないと、息が詰まって死んじゃうぞ」。でも、胡桃を見つけた雌鷄ちゃんめんどりちゃんはひとりですべて食べたんだ。そしたら、核さねがちっちゃな咽喉はに嵌まり込んで、怖くなって叫んだの。「雄鷄ちゃんめんどりちゃん、雄鷄ちゃんめんどりちゃん、急いで泉のお水を持って来て。でないと、息が詰まっちゃう」。そこで雄鷄ちゃんめんどりちゃんは泡喰うばって泉に行つてこう言った。「泉や、泉、お水をおくれ。雌鷄ちゃんめんどりちゃんにあげるんだ。あの子はあそこの胡桃の山で、今にも窒息しそくしそうなの」。すると泉が返辞した。「まずまあ、花嫁はなよめのところに行き、ぼくに花冠はなかんむりを持って来て」。そこで雄鷄ちゃんめんどりちゃんはぼくにお水をくれる。お水は雌鷄ちゃんめんどりちゃんにあげるんだ。あの子はあそこの胡桃の山で、今にも窒息しそくしそうなの」。けれど花嫁はなよめはこう返辞。「まずまあ、靴屋くつやのところへ行き、わたしのお靴を取って来て」。そこで雄鷄ちゃんめんどりちゃんは靴屋くつやに行くと、靴屋くつやはこう返辞した。「まずまあ靴豚くつとんのところに行き、わしに脂を持って来て」。すると靴豚くつとんはこう言った。「まずまあ牝牛めづのところへ行き、あたしにお乳を持って来て」。すると牝牛めづはこう言った。「まずまあ牧場まきばのところに行き、あたしに草を持って来て」。——雄鷄ちゃんめんどりちゃんが牧場まきばに行つて、牧場まきばに、草をおくれ、と言うと、牧場まきばはとっても親切で、お花と草をたくさんくれた。急いでこれをお乳ちちを牝牛めづにあげると、牝牛めづは代わりにお乳ちちをくれた。お乳ちちをあげるとその代わり靴豚くつとんは脂あぶらをよこしてくれて、靴屋くつやはそれを革かわに塗り、すぐさま花嫁はなよめのお靴くつを渡した。お靴くつの代わりに花嫁はなよめはここに花冠はなかんむりをくれ、それを雄鷄ちゃんめんどりちゃんが泉いずみに渡せば、泉いずみは即座すなはちに澄み切ったお水を、雄鷄ちゃんめんどりちゃんが持つて来た小桶こぶくに



ざあざあ流してくれた。雄鶏ちゃんは走り、胡桃の山に引き返す。ただ雌鶏ちゃんのとこに着いたら、雌鶏ちゃんは息が詰まって死んでいた。雄鶏ちゃんは悲しくって堪らずコケコッコと高らかに啼き、それを聞いた近辺の動物たちはだれもかれも集まって来て、雌鶏ちゃんを悼んで泣いた。二十日鼠が六匹で霊柩車を造ってくれて、それに亡くなった雌鶏ちゃんを寝かせ、その前に自分たちが繋がれて、車を牽いて行ったのさ。さて、一同が、これすなわち、雄鶏ちゃんと、亡くなった雌鶏ちゃんと、二十日鼠と霊柩車が、がたごと進んで行くうちに、狐がそこへやって来て、「どこへ行くんだ、雄鶏ちゃん」と訊いたもの。

——「雌鶏ちゃんの埋葬に」。——「それじゃ、おいらが埋葬をしてやるぞ、この間抜けやろう」。そう狐はどなりつけ、雌鶏ちゃんを食べちゃった。だって死んだばかりだもんね。そうしてお腹に埋葬したのさ。雄鶏ちゃんは大声で嘆き悲しみ、こう言った。「それじゃあほくも死んじゃって、雌鶏ちゃんの傍に行きたいよう」と。——「それじゃあそうしてやろうかね」、狐は言って、雄鶏ちゃんをばつくり喰ってしまったので、雄鶏ちゃんは雌鶏ちゃんのとこへ行つたわけ。そこで二十日鼠たち、雄鶏ちゃんを悼んで泣くと、狐はこう考えた。こいつら、やっぱり死にたいんだな、と。そこでごっくり丸呑みにする。でも、この二十日鼠たち、霊柩車を牽いていたから、霊柩車も一緒に呑み込んだんだ。そこで車の轆がね、狐の心臓を突き破り、狐はころりとごっくり返り、四本の脚をつっぱらかした。小鳥が

一羽<sup>リ</sup>しな<sup>ン</sup>の木<sup>デ</sup>の枝<sup>(21)</sup>に止<sup>ト</sup>ま<sup>ッ</sup>つてこ<sup>ウ</sup>う囀<sup>オホホ</sup>ったよ。「お狐<sup>きつね</sup>さんがくた<sup>キ</sup>ば<sup>ツ</sup>った<sup>(22)</sup>。お狐<sup>きつね</sup>さんがくた<sup>キ</sup>ば<sup>ツ</sup>った」<sup>(22)</sup>って。

解題  
原題 *Vom Hähnchen und Hähnchen.*

## 二八 穀物の穂

昔むかしね、こんな時代があったんだよ。でも、これ、もう考えられないくらい前の前のことでね、その頃はさあ、どの穀物だつてそうだったんだけど、穀物の茎にはね、全部黄金色の穂がくっついていてさ、地面までびっしりだったんだ。貧乏とか飢饉なんて無かった、決して、決してね。これすなわち黄金時代だったわけ。そこで人間はだれもかれも大喜びで満腹したし、穀物を啄つづばむのが好きな鳥たち、鶏とか鳩とかその他いろんなのになつぷり餌が見つかった。

でも人間の中には、感謝つてことを知らない、神様を忘れてる没義道もぎどうな連中がいてね、こういう素晴らしくありがたい神様の賜物、大事な穀物を尻しつとも思わなかつたんだ。で、ちっちゃな子たちが手足を汚すと、ぎっしり実つた穂の束を使つて、子どもたちを綺麗に拭いて、その穂をぼいと堆肥たいひの山に抛ほうり投げるなんていう女どもがいたりした。また、下女たちはぎっしり実つた穂で拭き掃除をし、男の子や小さな女の子は大事な穀物畑で縦横無尽に追つ掛け合いやら掴み合いをし、中では隠れんぼ、上では転げ回つて、めちゃくちゃに踏みにじつた。食べ物として人間に、飼料として家畜に穀物をお与えになつたのであつて、悪ふざけで台無しにさせようためではない神様は、つくづくお嘆きあそばし、これはもう改めよう、黄金時代は終わりにいたそう、とお考えになつた。

そこで神様は、それからというもの、茎にはそれぞれたつた一つしか穂が付かないようになさつた。人間に対しては、大事な穀物をもつと心を籠めて扱うことを学ぶように、それから、罪の無い動物たちのためには、それでもなんとか餌が授かるように、とね。人間だけのことだったら、一つの穂でも戴く値打ちはなかつたんだだけ。

その時から飢饉とか、物価高とか、貧乏とかが世の中に誕生。ほんのときたま、めつたにあることじゃなかつたけ

ど、神様はそこここで、たくさん、たくさん穂の付いた奇蹟の茎を生やして、穀物というものはかつてはどんなだったか、ご自分に何がおできになるか、人間たちにお示しになる。そこで、民衆の間にはこんな古い預言が伝えられている。長い年月が経ってからいつの日にか、いと高き処には栄光、神にあれ。地には平和、なべての人人の間に優しみと祝福と愛のあれかし、との天使の御詞（23）が成就すると、大地は再び神によって覚醒され、根元まで穂がぎっしり付いた茎を実らせるようになる。けれどもわれらのうちだあれも生かしてそれにめぐり合うことはない、と。

解題

原題 Die Kornfrauen.



## 二九 兎と狐

兎と狐が一緒に旅をした。冬枯れ時で、青物は何一つ生えておらず、野原には生き物一匹見当たらなかつた。「こりやあ腹の空く天気だて」と狐は兎に言った。「五臓六腑がごろごろ鳴るわな」。——「全くさね」と兎は応じた。「どこもかしこも切り詰め所帯じよたつてやつ。口に突っ込むことができたら、あたしゃ、自分の匙さしだつて喰くつちみたい」。――

こうして空きつ腹でぼくぼく歩き続けていると、遠くから百姓娘が一人、こつちへやって来るのが見えた。この子は手籠を提げており、籠からなんと、も好い匂いが狐と兎に漂つて来た。焼き立ての丸麩せんメル麩ぼの香かだつた。「なあ、おい」と狐。「おぬし、横つちよにすつ転がつて、死んだふりをしろやい。あの娘つこが籠を置いて、哀れなおぬしの毛皮を手に入れよう」と——なにせ兎の皮は手袋になるでな——おぬしを持ち上げようとしたら、その隙に、おいら麩籠ぼを搔かつ攫さらつて、おらつちの元氣付けにする」。

兎は狐の言う通り、ひっくり返つて死んだふりをし、狐は雪の吹き溜まりのうしろに身を伏せた。やつて来た娘は、四本の脚をつっぱらかしている死んだばかりの兎を目にすると、まずちゃんと籠を下に置き、それから兎かがに屈かみこんだ。その途端、狐はさつと飛び出し、籠をはくつとくわえ、雲を霞と



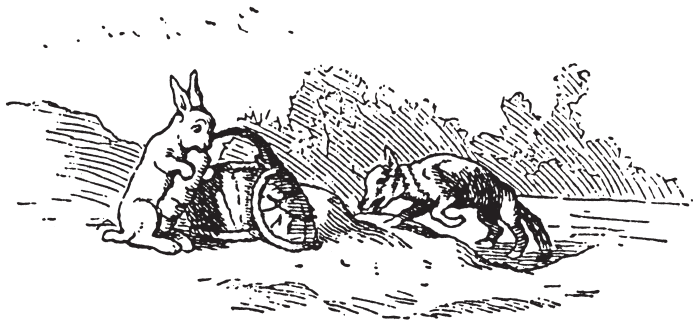


逃げ去った。兎もすぐさま生き返り、急いで道連れのを追っかけた。ところがあちらは全然立ち止まらず、麩麩を頒け合う気配もあらばこそ、自分だけで平らげちまおうという様子だった。それと見て取った兎は大いに気を悪くした。さて、二匹が小さな池の近くに來ると、兎は狐にこう呼び掛けた。「どうだろうねえ、あたしら、ご馳走用の魚を手に入れるってのは。そしたらお偉いさん方みたいに魚と白麩麩が揃うわけだ。あんたの尻尾をちよいと水の中に垂らしてごらんよ。そうしたら、今時やつぱりたんと喰う物のない魚どもがそいつにかじりつくだろうぜ。だれどさつさとおやりよ。池が凍りつかないうちにさ」。

狐は合点して、今にも凍りつきそうな池の畔ほとりに行き、尻尾の中に垂らした。ほんの僅か経つと狐の尻尾はかちかちに凍りついた。すると兎は麩麩籠バシをせしめ、丸麩麩ゼンメルを一つ、また一つと、悠悠閑閑、落ち着き払ってむしゃむしゃやりながら、狐に向かつてこう言った。「水が融けるまで待ってておくれ。春になるまで待ってておくれ。氷が融けるまで待ってておくれ。それからすたこらさつさと逃げ出した。狐は、鎖に繋がれた怒ったわん公よろしく、その後姿に吠えついた。

解題

原題 *Der Hase und der Fuchs.*



三〇 勇ましい横笛吹き<sup>(26)</sup>

昔むかし、横笛を吹かせたら名人芸の楽士があった。そこで世間を遍歴して回り、いろんな村や町で笛を吹いては、それで暮らしを立てていた。この男はそんな具合で、ある日の夕暮れ時、とある借地<sup>バ、ハ</sup>契約<sup>タ</sup>人の百姓屋敷に行き当たり、そこに泊めてもらうことにした。なにしろ夜にならないうちに次の村へ通り着くことはできなかった。借地契約人に親切に迎えられたのはいいが、一緒に食事をし、ご飯が済んだあとちよつと何曲か笛を演奏しなきゃならなかった。楽士がこれを済ませて窓から外を覗くと、月明かりでほんの近くに古いお城があるのが見えた。どうやら一部は崩れている様子。「あれはどういうお館で、どなたの持ち物ですか」と借地契約人に訊くと、相手はこんな物語をした。何年も何年も前のこと、あそこにとでも金持ちだが、なんともごうつくばりの伯爵が住んでいた。伯爵は下下をひどく苛め、貧乏人に施しをしたことなんぞあらばこそ、とうとう跡継ぎがいままま亡くなった。(けちんぼだから、伯爵が宝を埋めてしまったらしい、それは今でもあの古いお城に隠されてるかも、ともつばらの評判。もうたぐさんの人間が宝探しのために古城に出掛けたのだが、帰って来る者がだれ一人いない。そこでお上<sup>かみ</sup>は古城への立入りを禁止し、国中の人間全部に厳しくこれを警告した、とね。

楽士は注意深く耳を傾け、借地契約人の話が終わると、自分もあそこに行きたくてむずむずする、自分は勇ましく、ぞつとすると何のことだか分らないくらいだから、と言った。借地契約人は、若い命は大事にしなきゃならない、お城に行つてはいけない、と一所懸命、果ては跪<sup>ひざまず</sup>かんばかりに頼んだが、哀訴嘆願も役には立たず、楽士はびくともしなかった。



借地契約人の二人の下男が二つの角灯ランタンに火をつけて、勇ましい楽士を不気味な古城まで送って行く羽目になった。城に着くと楽士は下男たちを角灯一つとともに帰してやり、自分はまだ一つを手にして勇敢に高い階段を昇って行った。昇りきると大きな広間に入ったが、広間を廻めぐって幾つもの扉があった。楽士は最初の扉を開けて中に入り、そこにあった古風な卓子テーブルの前に腰を下ろし、その上に灯りを置いて、横笛を奏でた。借地契約人の方はというと一晩中心配で心配で眠れず、何度も窓から外を眺め、あちらで客人がまだ音楽をやっているのを聞かたびに、言いようもなく喜んだ。けれども自分のところの壁掛け時計が十一時を鳴らし、笛の演奏が止んでしまうと、ひどくびっくりして、幽霊だか悪魔だか、あるいはその他の、城に巣食っている代物がきつとあの好青年の頸根ひねっこを捻ひねってしまったに違いない、と思ひ込んだ。さて、こ

ちらはというと、怖さなんぞ感じないで演奏に耽っていたのだが、借地契約人のところではあまり食べなかつたので、とうとう空きっ腹になってしまい、部屋の中をあちこち歩いて、見て回った。すると茹でてない扁豆ひらまめが一杯入った鍋があるのに気付いた。別の卓子テーブルには水をたつぷり湛えた容れ物、塩の入った容れ物、それから一壺の葡萄酒があつた。そこで急いで水を扁豆に注ぎ、塩を加え、薪たきぎも傍にあつたから煖炉だんろに火を起こし、扁豆の羹シチュウを煮た。羹シチュウが煮える間、葡萄酒の壺を空にし、それからまた笛を奏でたもの。扁豆が煮えると、それを火から下ろし、卓子テーブルの上に用意されていた皿によそい、元氣はつち激濁はつちこれにむしゃぶりついた。時計を見ると十二時頃。すると突然はたと扉が開き、二人のつぽで黒装束の男たちが部屋に踏み込んで来たが、棺が一つ載っている棺台を担いでいた。こやつらはこれを一言も言わず、平然と食事を続けている楽士の前に置くと、来た時と同様音も立てずに扉から外へ出て行つた。二人がいなくなると、楽士はぱつと立ち上がつて、棺を開いた。中に横たわっていたのは、ちっぽけで皺しわくちゃ、白髪、白髯の年取つた小人だつた。けれども若者はびくともせず、小人の体を引つ張り出すと、煖炉の前に置いた。そして、暖まつたかな、と思うと、生気が戻つた。そこで楽士は扁豆をあてがつてやり、一所懸命この小人の面倒を見た。いやもう、おつかさんが子どもにうまうまさせてやるような具合にね。すると小人は完全に元氣になつて、若者に「わしについて来い」と言つた。小人が先に立つたが、若者は角灯カクドウを手に取り、平氣の平左で後について行つた。小人は案内して高い崩れた階段を下り、とうとう二人は地下深い、ぞつとするような丸天井の穴蔵に着いた。

ここには金が大きな山に積んであつた。小人は若者にこう言い付けた。「この山を丁度真つ二つになるよう分けるのじゃ。したが、何も後に残らぬようにな。さもなくば、わしはおぬしの命を貰い受けるぞ」。若者はにっこりしただけで、すぐさま二つの大きな卓子テーブルの上へ、あちらへ、またこちらへと数え始め、僅かの間にその金を大きく二つに分けた。が、しかし、最後にクロイツァー銅貨銅貨が一枚残つてしまつた。でもちよいと思案してから、懐中小刀ポケットナイフを出す



と、刃をクロイツァー銅貨の上に置き、ありあわせた槌を振るって二つに切り割った。さて、楽士が半分をこちらの、もう半分をあちらの山へ投げると、小人は上上のご機嫌になって、こう言った。「おぬし、見上げた男だの。おぬしはわしを救うてくれた。もう何百年もわしは貪欲な根性から掻き集めた自分の宝を見張らにゃならなんだ。だれかがこの金をうまく真つ二つに分けてくれるまではなあ。これまでだれ一人やつてのけられた奴はおらんかった。それでわしは連中を残らず絞め殺さにゃならなんだ。さて、このうち一山はおぬしのもんじゃ。もう一山の方は貧民どもに頒けてやってくれい。ありがたい御仁ごじんだて、おぬしはわしを救うてくれたのじゃ」。そう言うなり小人は消え失せた。若者は階段を昇り、前の部屋に戻ると、愛用の横笛で幾つか楽しい小曲を吹いた。

楽士がまた演奏しているのを聴いて借地契約人は喜び、翌日ごく早朝に城に上がって行き（というのも日中はだれでも入れたので）、嬉しさ一杯で若者を迎えた。こちらは相手に一部始終を物語り、それから自分の財宝のところ以降りて行き、小人の指図通りにして、半分を貧民たちに頒け与えた。それから古い城を取り壊させたが、間もなく元の場所に新しいのが建ち、金持ちになった楽士がここに住んだ。

解題

原題 *Der beherrzte Flötenspieler.*

A T U 三二六 「やことすとは何か覚えたがった若者」 The Youth who wanted to Learn What Fear is

三一 兎番と王女

あるお金持ちの王様にとても綺麗な姫君がいた。王女が結婚しようと思った時、名乗り出た求婚者たちは全員ある緑の草地に集まらなければならなかった。そこでお姫様は黄金の林檎を何度か空高く抛り投げた。それを受け留めて、それからわらわ自らが出す三つの難題を思い切つてやつてみよう、というお方こそわらわを娶つてしかるべし、つてのがそのお言葉。さて林檎を受け留めた男はたくさんいた。最後は美青年で勇敢な羊飼いの若者だった。でもだあれも三つの難題を解決することはできないままで、とうとう、求婚者のどんじりで、しかも一等身分が低い羊飼いの若者の番にな



った。最初の問題。王様はある家畜小屋に兎を百羽飼っている。これを草地に放して、番をして、夕方また元に戻す、それで一番目の課題をこなしたことになる。これを聞くと、羊飼いの若者はこう言った。まず一日そのことを思案しようございます、でも二日目になったら、それを思い切つてやってみるかどうか、ちゃんと決心いたします、てね。さあて、羊飼いの若者は山の中をうろつき廻り、しょんぼり沈み込んだ。だつてさ、やってみなくちゃならない企てに氣き後おくれたんだもの。すると一人の婆様に出くわした。婆様はなんでしょげているのか訊いたものさ。こちらはこう答えた。「ああ、だれもおいらのこと助けられつこありません」と。白髪の婆様いわく「はなつからそう決め込むもんじゃない。おまえさんの悩み事を話してごらんな。もしかすると助けてあげられるかも知れない」。で、例の難題を話すと、婆様は小さな笛を一つくれてこう言った。「これを大事に持つておいで。役に立つだろうよ」。そして若者がありがとうを言わないうちに、姿を消してしまった。さて、氣も晴れ晴れと王様の許へ行き、「おいらは兎の番をします」と言上すると、兎どもは家畜小屋から放された。でも、びりの兎が外へ出た時には、最初のはもう見えなくなつていた。雲を霞と逃げちゃつたんでね。若者の方は野原へ行つて、緑の丘の上に座り込み、どうしたらよかう、と考えた。その時もらつたあの小さな笛のことを思いついた。急いで取り出して、ぴいっと吹くと、百羽の兎が皆びよんびよこ戻つて来て、緑の丘の若者の周りで楽しそうに草を食はんだ。

けれど、王様とお姫様は、羊飼いがこの難題を片づけて姫君を手に入れるなんてことは、てんから問題にしていなかつた。なにしろ若者はつまらない貧乏人で、高貴な生まれじゃないんだから。で、兎番が群を一匹残らず小屋に戻せないようにしよう、と策略を廻らした。

そこで王女が出掛けて行つた。あらかじめ扮装ふんそうして、若者が気がつかないように顔も変えてね。でもこちらは、お姫様だつて分かつたんだよ。さて、兎が全部揃そろっているのを見た王女はこう訊いた。「ねえ、ここで兎一羽買えない



かしら」。若者いわく「売る兎はない。でも  
稼いで手に入れることならできる」。そこで  
王女は更に訊いた。「それってどういうこと」。  
若者「あんたが身を任せておいらの恋人にな  
って、おいらとうっとりするよな羊飼いの  
一刻ひととき「甘い愛の一刻」<sup>(32)</sup>を過ごしてくれたら  
ね」。お姫様はいやだった。だけど、どうし  
ても兎は欲しいし、相手は、そうでなくっち  
ややらない、って言うものだから、とうとう  
しぶしぶ承知した。若者は王女をたつぷり抱  
き締めたり接吻くちづけしたりしてから、兎を一羽捉  
まえて、彼女のちいぢやな手籠に入れてやつ  
た。そこであらは立ち去った。ものの十五  
分も離れた頃、若者が小さな笛を一吹きした。  
するとたちまち兎は手籠の蓋を押し開けて、  
外へ飛び出し、またびよんびよこ戻って来た。  
ほどなく今度は王様が身をやう匍してやって来  
た。でも若者には王様だつて分かつたんだ。



王様は驢馬に乗り、籠をぶらぶら下げていた。で、こう訊いた。「兎を一羽売つてもらえんかの。「いいや、売らない。でも稼ぐなら一羽やる」つて若者ははずけずけ応対した。「そりやどいう意味だね」と王様。「あんたがここで驢馬の尻尾の下に接吻すれば」と若者が始めた。「そうすりゃ一羽あげようよ」。そんなこと王様はしたくなかった。で、一羽売つてくれれば、ずっしりとお金を払おう、と申し出た。でも若者は譲らない。そこで王様は、兎がお金じや手に入らない、と看取つて、とうとうしぶしぶ承知し、驢馬の尻尾の下にぶちゅっと思うさま接吻した。そういうしだいで兎が一羽捉まり、驢馬に付けた籠に入れられ、国王は立ち去つた。でもあちらがまだそれほど行かないうちに、若者が笛を吹くと、兎が籠からびよんと跳ね出し、戻つて来た。この後王様はお城に帰り着いてこう言った。「たちの悪い若造じゃ。余は一羽も手に入れられなかつた」。何をやらかしたのは言わなんだが。「ええ」と王女が返辞。「私もそうでしたの」。でも、自分が何をつかまつたのか、これも告白しなかつた。夕方になると、若者は番をした兎を連れて戻り、数を王様の前で数え、百羽全部を家畜小屋に入れた。

そこで王様は口を切つた。「最初の問題は片付いた。今度は二番目に取り掛かろう。よう聴け。余の穀物倉に豌豆<sup>たんとろ</sup>が百マス、<sup>34</sup>扁豆<sup>ひらまめ</sup>が百マスある。余はこれを一緒にぶちまけ、よおく混ぜ合わせた。そちがこれを一夜のうちに灯りなしで選り分ければ、二番目の問題を済ませたことになる」。若者いわく「できますよ」。そこで彼は穀物倉に閉じ込められ、扉には固く錠が下ろされた。さて、お城中の人たちがすやすや寝入ると、若者は小さい笛を吹いた。すると何千もの蟻が這つて来て、長いことうようようじゃうじゃう蠢<sup>うごめ</sup>いていたが、とうとう豌豆は混じりけなしの一山、<sup>ひらまめ</sup>扁豆も混じりけなしの一山に積み上げられた。翌朝早く王様が検分すると、難題は解決されていた。王様は蟻には気付かなかつた。またいなくなつていたからね。王様は不思議で堪らず、若者にどうしてこれかできたのか分からなかつた。だもんで、こう言つた。「ではそちに三番目の問題を申そう。今夜大きな部屋一杯の麩麩<sup>パ</sup>を食べ尽くして、何

一つ残らぬようにすれば、三番目の問題をやってのけたことになる。さすれば余の息女をそちに遣わそうぞ」。

暗くなるも若者は麴麩貯蔵庫に入れられた。ここには麴麩がぎっしり詰まっているので、彼が入った戸口の傍がちょっと空いているだけだった。でも、お城中の人たちがすやすや寝入ると、若者はまたしても小さな笛を吹いた。すると、気味悪いほどたくさん鼠が現れた。夜が明けると、麴麩は悉く喰い尽され、なんと、麴麩屑一かけら残っていなかった。こちらはというと扉をどンドン叩いて叫んだ。「開けておくれ。お腹が空いた」。てなあんばいで三番目の難題もおしまい。

ところが王様は更にこうのたまうた。「袋一杯「たくさん」の法螺噺を余らに語って愉しませてくれい。さすれば余の息女をそちに遣わそうぞ」。そこで若者はしゃべり始め、半日もの間突拍子もない法螺噺をしたが、袋は一向一杯にならなかった。そこでどうとうこう語った。「おいらは、許嫁のとっても可愛いお姫様ともう羊飼いの一刻を過ぎましたんですよ」。この言葉を聞いて王女は火のように真っ赤になった。王様はまじまじと姫君の顔を見詰め、法螺噺というのではあったが、それを信じ、それがどこでどう起こったのか、思い描いた。それから「だが、袋はまだ一杯ではないぞ」と大声を挙げた。すると若者はこう口を切った。「王様におかれましては驢馬のですね、驢馬の……」。——「一杯じゃ。一杯じゃ。袋の口を縛れ」と王様は叫んだ。だつて恥ずかしくて恥ずかしくて、やんごとないお唇からいかなるご恩寵が驢馬のやつめに下しおかれたのか、おおっぴらにしたくなかったんだもの。なにしろ、宮廷中の人間が環になって周りを取り巻いていたんでね。こういうわけで羊飼いの若者と姫君のご婚札が執り行われ、お祝いは十四日の間続いた。これがとつても素晴らしく、楽しかったので、語り手のわたしも、それに招待されたらなあ、つて思いますよ。

解題  
原題 *Der Hasenhüter und die Königstochter.*  
A T U 五七〇 「兎の番人」 The Rabbit-Herd.

三二 月の中の男の昔話<sup>メルヒエン</sup>

昔むかしの大昔のこと、ある男が大事な日曜日<sup>(37)</sup>の朝森へ出掛けて木を伐り、でっかい薪束<sup>まきたば</sup>を拵え、これを縛り、背負い梯子<sup>(38)</sup>を差し込んで薪束を背負い、家へ担いで行つた。

途中で日曜日の晴れ着を着た立派な男に出逢つた。どうやら教会へお参りに行くところらしかったが、立ち止まると、薪束を担いでいる男に話しかけて、こう言つた。「世の中じゃ日曜日だつてこと、ご存じないのかな。この日は、この世界とあらゆる動物たち、それから人間をお創りになつてから、神様がお休みになられたのだ。第三の戒め<sup>(39)</sup>に、この祝日を聖別せよ、と書かれていることをご存じないのかな」。こう訊いたのは実は神様ご自身だつたのだ。けれども木を伐つた男は強情<sup>(40)</sup>つ張りだもんでこう答えた。「この世の日曜日だろうと天国の月曜日だろうと、そんなこと、わしに何の拘わりがある。それに

あんたに何の拘わりがある」。

「それではそなたは永遠に粗朶<sup>そだ</sup>の束を背負つているがよい」と神様はおつしやつた。「そして、この世の日曜日はそなたに全く無価値なのだから、今後永えに月曜日<sup>(41)</sup>でいて、月の中に立ち、日曜日に仕事をしてこれを穢<sup>けが</sup>す人に対する警告<sup>しるし</sup>の徴となるがよい」。

その時から今までずうつと月の中には薪束を背負つた男が立っている<sup>(42)</sup>。多分<sup>たぶん</sup>永久<sup>とこわ</sup>にそうやっているだろう。



解題  
原題 *Das Märchen vom Mann im Monde.*  
ATU 該当なし。

## 三三三 風呂屋の国王

昔むかしある国王がいた。ドイツ語を話す者たちや南国語を話す者たちの<sup>(1)</sup> 国をたくさん従えていたので、大層慢心してしまい、この世で自分ほど権勢のある偉人はおらぬ、と思うようになった。さて、ある時、こんなことが起った。晩課<sup>(2)</sup>に出席したところ、僧侶がこんな詞<sup>(3)</sup>を読誦するのを聴聞。デポサイト・ポテンテス・デ・セデ・エト・エクサルタウイト・フミレス<sup>(4)</sup>。ラテン語なんぞ皆自分からなかつたから、あれはどういう意味だ、と、周囲の学識ある者たちに訊ねたところ、こう解き明かされた。主なる神は、権勢<sup>(5)</sup>ある者を座位<sup>(6)</sup>より下し、卑しき者を高うす、でございませう、と。王はこれを聞いてびっくり仰天、それからかんかん腹を立て、福音史家ルカのこの章句は自今もはや唱えてはならぬ、何人もこれを聴いてはならぬ、して、これはもろもろの聖典から完全に抹消せよ、との布告を出した。この布告は王の使者たちによって全ての国、全てのキリスト教徒、全ての修道院に送られた。この章句が載ったままになっている本は焼き捨てよ、とされた。こういふしだい、かの言葉は繰り返し繰り返し破壊され抹殺され、教会で公に読誦されたり詠唱されたりすることはもはやなくなつた。

さて、ある時、国王が浴場に出掛けた。すると神は、福音の聖句を穢<sup>(7)</sup>した冒瀆行為を償わせようと、一人の天使をお遣わしになつた。この天使は王の姿になり、あらゆる人人の目を眩<sup>(8)</sup>ましたので、だれもが天使を、王様だ、と思ひ、肝心の国王のことはそうだと分からなくなつた。王は風呂から出ると、「流し場の木の」長椅子に座つたが、これには天使が前から腰を下ろしていた。そこで浴場主は国王に向かい、そこを立って、他の場所に座るよう指図した。「そちは酩酊<sup>(9)</sup>いたしておるのか」と国王。「さような無礼な口調で余に語り掛けるとは。余はその方の支配者たる国王なるぞ」。——「あんた、空莫迦<sup>(10)</sup>なようだな」と風呂屋の亭主。「わが国王陛下はここにお座りじゃないか。おまえさ



ん、いったいどこのどいつの王様だったんだ。陛下におかせられてはご領国はいずれでございませぬ。アホラシア(46)かなんかですかな」。

「あのこ(47)な下司げすげろ下郎げらうめが」。怒り狂った王はこう叫ぶなり手桶を掴んで浴場主に抛り投げる。この騒ぎを耳にした風呂屋の雇い人たちが駆けつけ、王を拳骨でたっぶり按摩あんましてやった(48)。とうとう王の姿をしている天使が仲に入り、王を雇い人たちの手から救い出した。けれどもそれから、天使がそっちのことはほっといて流し場から出ると、天使をご主君と思い込んだ王の家来たちは、豪華な衣裳を着せ掛け、意気盛んな騎馬行列を組むと、いともさらびやかに居城目指して随行した。国王の方はというと、風呂屋の主人とその雇い人たちにすっぽんぼんの丸裸(49)で戸外に追い出されてしまい、扉の前に佇んで、わが身に何が降って湧いたのやら五里霧中。するとそこいらの連中が周りに集まって来、やい

のやいのと囃し立てた。これには王自身の召使どもまで参加。だって、だれにも王様だつてことが分からなかったもの。そこで王は裸のまんま、こけ苛めよろしく後を追つ掛けて来る民衆から逃げ出して、自分の酌人(49)であり誠忠な相談役である者の邸へと急いだ。

これは小昼時過ぎ(51)のことで、酌人は昼の憩いを楽しんでいた。そこへ王が門の鐘を鳴らし、中へ入れよ、と要求した。門番が、おまえはだれで、何の用か、と訊くと、相手が言うには「余だ。国王だ」。

「うへえ、ちえつ、ちえつ」と門番は叫んだ。「こんなみつともねえ王様なんぞ、見たこともねえ。きさま、決して入つてはならん」。そこで国王はおっそろしくわめき散らして大騒ぎをやらかしたので、酌人がそれを聞きつけ、どうしたのか、と訊ねた。門番いわく「旦那様、表に男が一人おりまして、うしろにやあ有象無象(50)どもがくつついとります。やつら、こけを嘔い物(52)にしとるのですな」。

「そやつを入れてやれい」と酌人は憐れんで命じた。「そして、必要な衣類を与え、裸体を被おわせるのだ」。それが済むと、王は酌人の許にやって来たが、こちらは相手のご主君だとはやはり一向分らない。国王「おお、わが友よ。そなたは、余がそなたの王である、と認めるであろうし、そうあらねばならぬ。今日、世にも奇妙な災厄が余の身に降り掛かり、余の面目を丸潰れにいたしましたのだが。昨日の朝、われらが内内で談合した話を思い出してくれい。その折余はそなたら相談役にある勅令を出し、これが遂行されるのを見たい、と申ししたが、そなたらは、さようなことは君侯にふさわしゅうない、と諫めたのう」。このような機密事項を更になお王は酌人に告げたが、こちらは笑い出して、こう返辞。「あんたの言うことは本当だが、それは悪魔があんたの耳に吹き込んだに相違ない」と。そこで国王「余がいかなしだいでこうした不幸に見舞われたにせよ、それでも余の心は、この身が真正なる国王である、と告げておるわ」。



酌人は反駁する気はなかった。そんなことをすれば、阿呆あほうを憤慨させるのがおちだし、利口な人間相手の場合でも礼儀正しさの証あかしとは申せなかつたので。酌人はこの見知らぬ男に食事あじを供するよう言い付け、それからこう考えた。この珍しい事件はともかくにも陛下にご注進ちゆうしんいたそう、と。この御仁ごじん、すなわち酌人は、数数の賢明な助言によって宮廷で重んじられていたので、いつ何時なんじでも自由に参内することが許されていたのである。そこですぐさま仕度を調べて王城に向かい、例の天使の前にまかり出て、不思議なお客の話を言上した。すると天使は、王を宮廷に連れて来るよう命じたもの。そこで、大広間の一つに家臣全てが参集、召使一同はありとあらゆる階段と歩廊にむらがつた。さて、酌人がすっかり氣力を挫かれた王を伴って現われると、だれもかれも「ごきげんよろしゅう、国無しの国王殿」と嘲弄の喚声を挙げた。

天使は、麗しい王妃と並びいともきらびやかに玉座に座っていたが、自分の生き写しに会釈した。こちらは、仇とおぼしき相手が自分自身の伴侶を傍かたわらに従えているのを目の当たりにして、憎しみに胸が煮え滾うずる思い。天使が言うには「さ、申すがよい。まこと、そちらはこの国の王なのか」。王は答えた。「さよう、そうした日があった。余はこの国で権勢をふるっていた。わが妻は余を、王様、そして、背の君様、と欲び迎えたもの。今はそのにこやかな挨拶もまるで受けられぬが。したが、これはこれまで決して拒まれはせなんだ。今日というわが汚辱と苦難の日まではなあ」。王妃は、自分がこの見知らぬ男を抱擁したことがある、などと告げるこうした言葉を聞かされて羞恥に顔を赤らめ、天使に向かつて「御前様、ここの男は正氣を失っているのですしょうか」と訴え、一人の老いた宮廷騎士は「黙りおう、下司下郎。きさまなどは、牝牛の皮に乗せて絞首架に引きずって行かねばなるまい」と叫び、宮廷に寄食している若者たちは、剛勇ぶりを披露して主君の歡心を買おう、と王に掴みかかり、あやうくしたたかに酷い目に遭わせるところ。けれども天使はそれを制し、王をそこから連れ出して、人氣の無い立派な部屋へ導き、こう語った。「さ、

申すがよい。神があらゆる被造物を治らしめしておられる、と信ずるや否やを。見よ、神の全能の御力がそなたに屈辱を与えたもうたではないか。そなたの強大な軍勢が役に立ちしや。そなたの呼び掛けや命令に従った者のありしや。デボスイト・ポテンテス・デ・セダなる真実はいまだ生きている。そなたやそなたのごとき者がこの真実を曲げることは常永久にあるまし」。

こう天使が王に告げると、王は震え慄いて訊ねた。「これはしたり、あなたはどなた様で。お言葉に出された全能の神であられるのか。さあならば、この憐れな、惑わされた男になにとぞ恩寵を垂れたまわんことを」。

「神にはあらず」と天使。「なれど、御使いの一人にして、真のキリストの僕なり。われを、すなわち、そなたの傲慢不遜への懲罰を送りたもうたのは神。神はその思し召す者を高うし、また卑うせらる。なにゆえそなたはかくのごとき真実を迫害せるや」。

王は天使の足許にどっと崩折れ、神の恵みと宥恕を懇願した。天使は、身を起こすよう命じていわく「そなたは僧侶が読誦する章句のこの詞を信じなければならぬ。そなたは、蒙った苦しみを提訴しに来た人人に憐れみ深くあらねばならぬ。そなたは身分の低き者にも高き者と同様公正であらねばならぬ。かように努めようと心を定むれば、再び権勢と榮譽の座に就けるであろう」。

そこで王は改めて主の御使いの前にへりくだり、頭をうなだれ、跪いてこう応答した。「この身は喜んで仰せの通りにいたします。神の恩寵により赦したまえ」。すると天使は王に手を差し伸べ、王の装束を渡し、再び王の姿に戻してやった。王は、酌人が纏わせたまひすばらしい上つ張りを脱ぎ捨てた。天使はというと、王の眼前から消え失せ、再び天界へ、靈魂のふるさとへ、永遠の父の治ろしめす王国へと飛んで行った。

王は「甘美なる方、力ある方、キリストに讃えあれ。天使の言われたことは全き真実だ」と言って、ついで苦しみ

を蒙らなかつた者のようにその部屋から外へ出た。そこで家来たちは「陛下、あの阿呆はいずれに参りましてござりまするか」と恭しく訊ねた。しかし王は王妃と臣下一同を呼び集め、いかなることは起こつたのか、自分がどんな目に遭つたか、逐一語つて聞かせた。すなわち、浴場主との悶着もんぢやくなど一切合財いっぺがっさいを。そして例のみすぼらしい上つ張りを見せてやった。おべつか使いの廷臣たちはびっくり仰天、あのように主君を侮辱し、国王だと気付かなかつたことを恥ずかしく思い、その多くは、これはもう生命財産かみに拘わりそうだと考えた。王妃ですら背の君に、なにとぞお慈悲を、お恵みを、と



嘆願、王様でない、などと思ったことはありません、と誠心誠意誓ったもの。王は優しくその両手を握って、こう言った。「妻よ、いいからお黙り。これは神の思し召しだったのだよ。最後には余自身自分がだれなのやら分からなくなっていたくらいだからね」と。

さてそれから王は勅命を出して、デボスイトの章句をあらゆる書籍の、それが抹殺されていた箇所<sup>みまえ</sup>に書き込ませ、再び教会で読誦させ、まことに謙讓な支配者になった。この物語を読む人が願わくは神の御前<sup>みまえ</sup>でへりくだらんことを、そして、神が傲慢不遜から恩寵もて護りたまわんことを。

解題

原題 *Der König im Bade.*

### 三四 ちびっこの親指こぞう

昔むかし貧乏な籠作り職人がいた。おかみさんとの間に息子が七人あったけど、この子たちは歳の順にだんだんちびっちゃんくなって、末っ子なんぞは生まれた時せいぜい指の長さくらいしかなかった。そこで、親指こぞう、つて綽名あだなを付けられた。そりやまあ、その後なんとかいっばしに育ちはしたが、充分にわけてあげなかったから、この綽名はずっと随ついて廻まった。だけど、この子、なんとも利口で目から鼻へ抜けるちび公で、はしっこさと狡賢ずるさに掛かけては兄さんたちが総掛かりになったつて足許にも及ばなかった。

両親ふたおやの暮らし向きはいよいよもつて最悪さいあくになった。籠を作つたり麦藁むぎわらを編んだりは、「パン屋パンヤみたい」丸麩ゼンメルを焼くとか、「肉屋にくやみたい」仔牛こぎゅうを殺すとかみたいに儲かる稼業かせぎじゃないでね。かてて加えて諸色しよしきの高いご時世が到来すると、籠作りとおかみさんは、だれもかれも飛び切りの食欲じよくに恵あまれている七人の餓鬼うらぐんちよのお腹はらをどうやって一杯にしたものやら、心配で心配で身の置き所もなくなった。ある晩のこと、子どもたちが寢床ねどに引き揚げたあと、これからどうしたものか、と互いに知恵を出し合った二人は、籠編みの材料の柳やなぎが生うえている森へ一緒いっしょに連れてつて、そこにこつそり置き去りにしよう、と相談を纏まとめた。話の一部分始終に親指こぞうは聴き耳きみみを立てていた。兄さんたちのように眠ねっていなかったんでね。両親のけしからぬ申し合あわせをとつくり聞き納なめてしまうと、なにしろ心配で目を閉じちゃあいられなかつたので、自分と兄さんたちを助けるにはどうしたらいいか、と一晚中思案しあんを重ねた。朝早く親指こぞうは小川の畔ほとりに駆かけて行き、真まつ白な砂利すなごりを探たして衣囊ポケット一杯に詰め込んでから、家に戻かへつた。兄さんたちには、自分が聞いたことをただの一言もしゃべらなかつた。さて、両親は森へ行く仕度しどをし、子どもたちに随まいで来るよう言い付けると、親指こぞうは小砂利を一つまた一つと道に撒まいて行いつた。だれにも見られずにね。

にしろこの子は末っ子で、一番ちっちゃくて、一番弱っちいので、いつだってどんじりをのろろ歩くんだもの。親たちは、今度もそれに決まってる、って思い込んでいた。

森の中で親たちは子どもたちからこっそり離れると、突然いなくなつた。これに気付いた子どもたちは、親指こぞうは別だけど、そろって悲鳴を上げたんだ。親指こぞうは笑つて兄さんたちにこう言つた。「そんなにわあわあ情けない大声出さないの。ほくたちだけでちゃんと道を見つけようや」。で、親指こぞうが今度はどんじりじゃなくて先頭に立つて歩いて行くと、道は雑作も無く見つかつた。

両親が家に帰り着くと、神様のお蔭でお金が舞い込んだ。二人がもう諦めていた昔の貸しを近所の人が返しに来てくれたのだ。そこで食卓が撓しなうほど食べ物を買うことができたけど、そうになると、子どもたちを棄ててしまったのが後悔の種。そこでおかみさんが悲嘆にくれてかきくどき始めた。「ああ、ああ、お恵み深い、いともお恵み深い神様。子どもたちを森に置き去りにしなきゃあよかつたよう。ああ、ああ、今ならあの子たち、お腹一杯食べられるのに。今頃はもう狼どもがあの子たちを食べてお腹一杯にしてるかも。ああ、ああ、いとしい、いとしい子どもたちが帰つて来てくれたらなあ」ってね。——「母さん、ただいま」と落ち着き払つて親指こぞうが言つた。その時はもう兄さんたちと一緒に戸口まで来ていて、嘆きの声を聴いていたのさ。扉が開くと、ちょこちょこことこ入つて来たのは籠作りの卵たち——一人、二人、三人、四人、五人、六人、七人と。盛んな食欲も持つて帰り、ありついた食事はたっぷりしたお膳立て。子どもが戻つたのは素晴らしいこと。で、お金が足りてる間は、楽しく過すごした。これが貧乏な手職人の慣わしというもの。

大して日数が経たないうちに籠作りの小屋ではまたまた骨皮筋シユマルハンス右衛門が料理人頭に就任(57)「喰うや喰わずの暮らしになつた」。そして酒蔵主任(58)の方はもともといやあしなかつた「葡萄酒や麦酒ビールなんぞにはもともと手が出なかつた」。と



なると、子どもたちを森に置き去りにして運命の手に委ねようという例のもくろみが改めて復活。この計画、またぞろ父親と母親の間で声高な晩の対話として審議されたから、ちびっこの親指こぞうは今度も相談全部を一言一句余さず聴き取り、しつかり胸に刻み付けた。

翌朝、親指こぞうはやつぱり家からそつと忍び出て砂利を拾い集めようとした。が、おや大変、門かどぬきが掛かっていたのさ。親指こぞうはちっちゃ過ぎるので、門に手が届かなかった。そこで、別の手立てを考えた。森へ出掛ける時、親指こぞうは麴コ麴コをこつそり掠かすめ取り、砕いた麴麴コを撒いて行き、これで道がまた見つかる、と思った。

なにもかもこの前と同じだったけど、ただ違ったのは、親指こぞうに帰り道が分からなくなったこと。鳥たちが麴麴コ屑クズを一つ残らず綺麗さっぱり平らげちゃったので。良い知恵ってなかなか浮かばないもの⑩でね。兄さんたちは森の中でぎゃあつくわめき、痛

ましいとも切ないとも。森をふらふら歩いているうち、真つ暗になったものだから、おつそろしく怖がった。でも親指こぞうだけはわめきもしなければ、怖がりもしなかった。一本の樹の夜露を凌いでくれる葉っぱの屋根の下、ふかふかと柔らかい苔の上で兄弟七人は眠った。朝になると親指こぞうは周囲を偵察しようと樹に登った。最初は森の木しか見えなかったが、やがてちつぽけな小屋の屋根が目に留まった。方角を覚え込むと、樹から滑り降り、兄さんたちの先頭に立って勇敢に進んで行った。藪や茨や薊あざみなどと悪戦苦闘をした拳句、茂みの向こうに小屋が見つかったので、一同勇んでそちらへ行進、扉をこく慎ましやかにほとほと叩いた。出て来た女に親指こぞうが大層上手に頼んだ。なにとぞ中へ入れてくださいませんか、ぼくたち道に迷っちゃって、方角が分からないんです、と。女は「ああ、可哀そうな子どもたち」と言つて、親指こぞうと兄さんたちを家に入れたが、同時にこうも告げた。ここは特にちいさな子たちを食べるのが好みの人喰い男(9)の棲処だ、と。いやはや、けっこうな打ち明け話さね。子どもたちはこんなことを聞かされて、白楊やまならしの葉っぱ(10)のように震えたが、自分たちだつて何か食べたい、お腹一杯食べさせ、と言つた。もつとも女は親切で憐れみ深かったので、子どもたちを匿かくまい、食べ物もやつた。それからすぐしんずしんという聲あしおとと扉をどんと叩く音が聞こえた。ほかでもない、ご婦館あそばした人喰い男だつたわけ。こやつ、飯にしようと食卓に腰を下ろし、葡萄酒を運ばせたが、なにか臭におうとでもいうように鼻をくんくん鳴らし、「人喰いぞ」とおかみさんに叫んだ。おかみさんは、そんなことない、とご亭主をごまかそうとしたが、こちらは臭跡を辿り、子どもたちを発見した。恐ろしさのあまり身も世もないのを殺してしまおうと、もう長い小刀を研いでいた人喰い男だつたが、もうちよつと生かshとして御飯を食べさせてやつたらどうお、だつてみんながりがりじゃない、特にちびつこの親指こぞうはさ、という女房の頼みをだんだんに聞き入れ、性悪の人喰い男だがとうとう宥なだめられた。子どもたちは寢床に行かされたが、これはやっぱり一つの大きな寝台に人喰いの七人の娘たちが眠っている大きな部





屋だった。この娘たちは七人兄弟と同年。顔はとつても醜かったが、頭にはそれぞれちいちゃい黄金の冠を被っていた。こうしたことをすっかり見ておいた親指こぞうはやがて静かに寝台から出ると、自分と兄さんたちの寝間帽子ナイトキャップを取り、それを人喰い男の娘たちの頭に載せ、娘たちの小さな冠を自分と兄さんたちの頭に被せた。

葡萄酒をうんとこさ飲んだ人喰い男は子どもたちを殺そうという悪企みにまた取り憑かれ、小刀を手にして連中が眠っている寝室に忍び込んだ。頸を切っちゃおう、と思つてね。でも鼻をつままれても分らないくらい真つ暗だったので、人喰い男は手探りしながら歩き回っていた。そのうち、寝台の一つに突き当たつたので、眠っている者たちの頭を撫でてみた。すると小さな冠が手に触れたから、「おつといけねえ。こりゃわしの娘つ子らじゃねえか。この酔っ払いの羊「抜け作」めが、あやうく驢馬の遣り口「ばかな真似」をやらかしちまうところだった

わい」と言ったもの。

それからもう一つの寝台をなんとか探り当てると、寝間帽子ナイトキャップが手に触れたので、自分の七人の娘たちの頸をちよん切った。一人また一人とね。それから大の字に寝て転がって、とろんこに眠りこけた。親指こぞうは人喰い男がぐうぐういびき軒をかくのを聴き定めると、兄さんたちを起こし、皆一緒に家からこっそり忍び出て、逃げに掛かった。でも随分急いだものの、さっぱり勝手が分からなかったから、いつまで経っても道に踏み迷うばかり。心配で心配でならなかった。

朝になると人喰い男は目を覚まし、女房にこう言った。「さあ、あの餓鬼どもの仕度をしてやんな(63)。昨日のやつらのよ」。こちらは、子どもたちを起こせ、と言われたものだと思つて、心配しいしい二階の部屋へと上がつて行つた。事件を目の当たりにしたおかみさんはなんとも仰天、目撃した恐ろしい光景にすぐに氣を失つた。女房があんまり長いこと下りて来ないものだから、人喰い男が上がつて行くと、自分がやつてしまったことを見せつけられたわけ。こやつがどんなに怒り狂つたか、なんともかとも言いようがない。そこでかねて持つていた七哩靴ななマイル(64)を履いた。これは履いて七歩歩くたびに、一哩進むという靴で、まことに大した品。しばらくすると兄弟たちは、人喰い男が山や谷を越えてこちらへやつて来るのを遠くから見て、とても不安になった。でも親指こぞうは兄さんたちと一緒にとある大きな巖に開いている穴に隠れた。この巖まで来ると人喰いは、少し休もう、とその上に座り込んだ。なにしろくたくただったんで、で、間もなく寝込んでしまい、嵐が轟轟ごうごう吹き荒ぶような軒をかき始めた。人喰い男がこんな具合に眠つて軒をかいていると、親指こぞうは隠れていた穴から二十日鼠あつらみたいにくっそり忍び出て、哩靴を脱がせ、自分が履いた。ありがたいことにこの靴には、寸法を取つて誂あつらえたように、鑄型に嵌めたように、だれの足にもびつたり合うという特性があつた。さて、親指こぞうは両手にそれぞれ兄さんの一人の体を掴み、この子たちはこの子たち



で両手で他の子たちと手を握り合い、そういう風にして、あつという間に七哩靴でうちへ帰ったのさ。で、一同、よく帰って来たねえ、つて両親に迎えられたけど、親指こぞうは両親に、兄さんたちの面倒をちゃんと見てやってちょうだいね、と頼み、ぼくの暮らしは今後靴の助けを借りて立てて行くつもりなんだ、と言った。言うが早いか一歩踏み出すと、もうずうつと遠くに行っちゃって、更に一歩で半時間以上も掛かる山のとっぺんに着き、また一歩で両親と兄さんたちには見えなくなっちゃった。

とどのつまり親指こぞうはせしめた靴のお蔭で運勢を切り開いた。<sup>(6)</sup>大旅行、長距離旅行をたくさんやり、高貴なご身分のお歴々大勢に仕えた。どこかでおもしろくないことがあれば、即座にほか様へ退散。雇い主が追手を掛けたところでき、徒歩でも騎馬でも追いつけっこなしでしょ。とまれかくまわれ、親指こぞうがこの靴のお蔭でやってのけた冒険の数数はなんともかとも言いようがない。

解題  
原題 *Der kleine Däumling.*

## 三五 魔法試合

ある時若い製本屋の職人（セ）が他国に出掛け、懐に鏢（びたいちん）一文無くなるまで旅をして廻った。財布がぐんにやり萎（し）んでしまふという緊急事態に見舞われては、いくらなんでも好い加減に仕事口を探さざるをえず、幸いすぐにある親方（マイスター）に雇われ、上上の暮らし向きになった。親方いわく「若い衆、おまえさんはわしんとここで楽にやってくれるだろうて。毎日こなさなきゃならん仕事はごく些細なもの。おまえさんはここにある本に塵埃（ちりぼこり）が付かないように毎日ちゃんと綺麗に掃（は）つて、また元通り順番に棚に収めさせすりやええ。ただの、ここに特別に離して置いてあるこの一冊の袖珍（しゅちん）本（ほん）だが、これには、おまえさん、手を触れちゃいかん。ましてや中を覗くなんぞもつてのほかだぞ。さもないとひどいことになるて。いいか、若いの、こいつをよおく覚えておけや。その代わりにな、他の本ならおまえさんが好きなだけ読んでよろしい」。

職人は主人の親方の言葉をしっかりと肝に銘じ、二年の間極めて安楽な日日を送った。毎日やることといったら本を掃除して、それからそのうちの何冊かを読むだけで、飛び切り上等の食事にありつく——それで、あのご禁制の袖珍本には全然手を触れなかった。そういうしだい若者は主人の全幅の信頼をかちえた。そこで親方はよく何日も家を留守にするようになり、果ては時折旅行なんぞもくろんだ。でもねえ、人間てのはしちやいけないつてなるとやりたくつてうずうずするもんでしょ。そこである時のこと、親方が数日旅に出ていなくなると、職人は、いとも厳かにいつも所定の場所に鎮座ましましている例の袖珍本に書かれていることをどうしたって知りたい、と強烈な欲望に駆られた。——だってねえ、他の本は全部もう読んじゃってたんだもの。そりゃ確かに、いけないって言われたことをやるとなると良心はちくちく痛んだ。でも好奇心の方が強かった。で、袖珍本を手を取って、開き、中味を読み始



めた。本に書いてあったのは、この上もなく貴重な、おっそろしい真言秘密で、それにはなんとも偉大な魔符呪符の教数が含まれていた。ただただ驚きに打たれ、びっくり仰天していた職人だったが、やがてだんだん全てが太陽のように明らかになり、魔法で何かをいろいろやってみるほどになった。実験は悉く成功。若者が本にある効き目の強い魔法の文句を唱えようと、即座に願った物が目の前に現れた。本はどんな人間でも別の姿に変えてしまう術も教えてくれた。職人は何度も何度もやってみて、最後には自分自身燕に変身、本を携えて生まれ故郷へ大急行で飛んで行った。若者の父親は、燕が一羽自宅の窓から飛び込んで来たかと思ったら、突然二年間も会っていない息子の姿になった時には少なからず驚いた。若者「お父つあん、これでぼくたち、もう大丈夫、安全だ。ぼくはねえ、魔法の本を持って来たの。これを使えば大金持ちになれるかも知れないよ」。爺さんにはまことにありがたいこと。なにしろ暮らしはなんとも苦しかったからね。それから間もなく若い魔法使いはすこぶるでっかい、肥えた牡牛<sup>(2)</sup>になり、父親にこう言った。「これからぼくを市に連れ

てって、売っておくれ。だけど、うんとこさ高い金額を吹っ掛けるんだよ。だれでもぼくには飛び切りの値段を払うこつたろう。でもね、ぼくの左の後ろ足に巻いてある細紐を外して、そいつを持って帰るのを忘れないでよ。さもないと、ぼくはそれつきり戻れなくなっちゃうから」。

父親はなにもかもその通りにした。牡牛は大金で売り払った。なにしろ、爺さんがこの牛を連れて市に現われると、すぐさま周りに黒山の人だかりができ、だれもがこの逸物の牡牛に感嘆、キリスト教徒もユダヤ人もこれを買おうと今にも殴り合いをおつ始めんばかり。ところが最高の付け値をして金を払った買い手が意気揚揚と牡牛を連れて帰ったはいいが、翌朝家畜小屋には例の素晴らしい牡牛の代わりに藁が一束転がっているだけだった。そして製本屋の職人はというと、こっちは上機嫌でお父つつあんの許に戻り、売れた金でそりゃ豪勢にご満悦で暮らしたもの。いやあ、でっかくて肥えた牡牛「のろまのでかぶつ」になる奴は少くないけど、だあれもそいつに高い金なんぞ出しゃしないんだけどなあ。

それから間もなく若者はまたしても見事な黒馬あおに化け、父親に馬市へ牽ひいて行って売ってもらった。この世にも素晴らしい、輝くばかりの毛並みの黒駒を見ようと、またもやわんさか人だかりができた。——さて例の製本屋の親方だが、帰宅してすぐさま何が起こったか見て取った。元来製本屋なんかではなく、強大な魔法使いで、ただ世間体を繕うために商売をやっていたに過ぎなかったのか、「何なに事が起こったのか」すぐさま悟り、ずらかった職人の追跡に掛かった。その馬市で買い手たちの中にいた親方は、例の小さな魔法書のあらゆるとあらゆる箇所によくよく通じていたから、すぐさまこれがどういふ素性の馬なのかに気付き、「待ってろ、これからささまをとっ捉まえてくれるわ」と思った。そしてどんな値段でも構わずこの馬を買おうとした。これは大した雑作も要らずに成功。だって、吹っ掛けられた最初の売値をすぐさま呑んだんで。父親にはこの買い手がどういふ人間だか分からない

かったが、馬の方は烈しく震え、しとどに汗を流し始め、おつそろしくびくびく、怖気づいた様子になった。<sup>(7)</sup>でも、父親は息子のこうした危機には感づかなかつた。持ち主が新たになつたこの馬が厩うまやに入れられ、所定の場所に繋がることになる、父親は前と同様細紐を解こうとした。ところが、買ひ手はそれを断じて許そうとしなかつた。そんなことをさせたら、自分の獲物に何が起きるかよくよく承知してたものね。そこで父親は細紐を持たずに引き下がるほかはなかつたが、心中こう考えたわけ。息子はきつと自分でなんとか抜け出せるだろう。馬になるくらいにできるんだから、さぞかし心得ている魔法を使つてあそこの厩から自由になつてうちへ帰つて来られるはずだ、つて。

ところでその厩にはたくさんの連中がやつて来て、押し合いへし合いの騒ぎになつた。大人も子どもも古いも若きも——皆飛び抜けて立派な馬を見物したかつたのさ。腕白な男の子が一人、見物するばかりじゃなく、馬を撫でたり、優しく体を叩いたりしようとした。馬もどうやらこれが至極ひじく気に入つたようだつた。そこで、この少年がますます親しげに近づいて、馬の頭や平頸ひらくびを撫でていると、ごく低声こゝろで馬がこう話し掛けた。「おい、好い子だな、おまえ、小刀持つてないかい」。わくわくした男の子は返辞。「持つてるさ、ちゃあんと良く切れるのをね」。すると黒馬あおはまたしてもごく低声で「ぼくの左の後足の細紐を切り落としておくれ」と言った。そこで少年が真つ二つに切つた。その途端、皆の目の前で駿馬はくたくたと崩折れ、一束の藁になつてしまつた。そしてその中から一羽の燕が飛び出し、厩から中天高く舞い上がった。親方は、ほんのちよつと馬に注意を怠つていたんだけど、今度は時を移さず、術を用いてぱつと秃鷹に変身、逃げて行く燕に襲ひ掛かつた。もう少しのところ、秃鷹は燕を鉤爪かぎつづで掴むところだったが、仇敵に気づいた小さい燕は地上を見下ろし、丁度眼下に美しいお城とお城の外に座つてお姫様を見掛けたので、黄金きんの指環に姿を変えると、うまいことびつたりとも優しきお姫様の膝に落つこつた。王女様は何が何やら分から

なかつたが、その可愛い指環を指に嵌めた。けれども禿鷹の鋭い目は全てを見ており、魔法使いの親方は禿鷹から小粋な貴公子の姿に化け、姫君に歩み寄り、いとも雅やか、かつ鞠躬如として、てまえ、その指環である手品をやったところでございます、なにとぞお手ずからお下げ渡してくださいませよう、と頼んだ。麗しいお姫様はぼつと顔を赤らめて微笑み、指環を抜いて手品師に手渡そうとしたが、なんとね、王女様のあえかなお指から指環はぼつと落ちて、ちっちゃな黍の粒になると、石の割れ目に転がり込んだ。その途端貴公子は威張りんぼの雄鶏(こ)になり、嘴(くちばし)でせつせと石の割れ目の黍の粒をつつき始めた。ところがすぐさま黍の粒は狐になり、雄鶏の頭を喰いちぎった。こういうしだいで魔法使いの親方は試合に負けちゃったわけ。さて若い職人は再び自分の姿に戻ると、王女様の足許に跪き、私めをお指にお嵌めくださり、かくして私めとご婚約たまわりまして、まことに黍(かたじけ)う存じます、とお礼を言上した。お姫様はこうしたことどもを目の当たりにしてびっくり仰天。だって、まだとっても若くて、おぼこだったんだもの。で、若者にその心もお手もくだすったけど、それは条件付き。今後若者は一切変化しないこと、いついつまでも渝(かわ)ることなく自分に信実(まこと)を捧げること、っていうね。若者はこのことを誓約し、魔法書を火にくべてしまった。そんなことをやらかしたのは良くないよなあ。だってさ、読者のきみとか、あるいはこのわたしなんぞに献呈、遺贈することだってできたでしょ。ま、そんなのをもらったって、わたしたち二人は絶対に牡牛にやならなかつたらうけど

す。

#### 解題

原題 Der Zauber-Wettkampf.



### 三六 オードと蛇

昔むかし男が一人いたが、これには娘が三人あった。末っ子はオードという名前だった。三人娘の父親はある時市に出掛けることになり、何を土産に持って来て欲しいか、娘たちに訊いた。長女は黄金きんの糸線いとりのくるまほ車を、次女は黄金の糸巻いとまき棒ぼうを土産に、と頼んだが、オードはこう言った。「わたしには、父さまの帰り道で馬車の下から逃げ出すものを持っていらしてくださいな」と。さて父親は市で上の二人の娘たちが欲しがったものを買入れると、家路に就いた。そしたらね、一匹の蛇が馬車の下へ入ったので捉まえて、それをオードに持って帰ることにした。馬車の床に投げ込んだが、うちに着くと、戸口の外に放っておいた。オードが家から出て来ると、蛇がしゃべり始めてこう言った。「オード、いとしいオード。ほく、玄関に入っちゃいけないかい」「なんてこと」とオード。「お父様はおまえをうちの戸口まで連れて来たのだけど、お玄関にまで入りたいなんて」。でもとにかく蛇を中へ入れてやった。さてそれからオードが自分の部屋に引き揚げようとすると、蛇はまたもやこう叫んだ。「オード、いとしいオード。ほく、きみの部屋の扉の外にいちやいけないかい」。——「あらまあ、なんてこと」とオード。「お父様はおまえをうちの戸口まで連れて来たのだけど、わたしはお玄関に入れてあげた。そしたら今度はわたしのお部屋の扉のお外にいたいなんて言うの。でもまあいいでしょ」。——さてオードが自分の寝室に入ろうと部屋の扉を開けると、蛇はまたもやこう叫んだ。「ああ、オード、いとしいオード。ほく、きみの部屋に入っちゃいけないかい」。——「なんですつて」とオードは声を張る。「お父様はおまえをうちの戸口まで連れて来たじゃない。わたしはお玄関に入れてあげ、それからわたしのお部屋の外まで連れて来てあげたじゃない。——でもまあ、もうこれでおしまいなんだったら、お入りなさい。でも、言っときますけど、おとなしくしてるんですよ」。そうしてオードは蛇を入れてやり、服を脱ぎ始めた。さて、



寝台に上がろうとすると、蛇がまたしてもこう叫んだのさ。「ああ、オーダ、こよなくいとしいオーダ。ほく、きみの寝床と一緒に入っちゃいけないかい」。——「それはあんまりよ」とオーダは怒って大きな声を出した。「お父様はおまえをうちの戸口まで連れて来た。わたしはお玄閥に入れてあげ、そのあとわたしのお部屋の外まで連れて来て、そのあとお部屋に入れてあげた。——それなのに今度是我の傍で一緒に寝たいって言うの。だけど、おまえ、凍えているのかな。じゃあ、お入んなさい。そして暖まるといいわ、可哀そうな蛇ちゃん」。そして気立ての好いオーダは柔らかく暖かい手を伸ばし、冷たい蛇を持ち上げて寝床に入れてやった。すると突然蛇の姿が変わったんだよ。長いこと魔法に掛けられて

いて、それが解けるのは、これまででもらったようなことが全部起こらないとだめだったのさ。蛇の姿は変わってね、——うら若い綺麗な王子様になったんだ。王子様はすぐに気立ての好いオーダをお嫁さんにもらいました。

解題

原題 *Oda und die Schlange.*

## 三七 仔猫と編み針

昔むかし貧しい女があつて、薪たきぎを集めに森に入った。重荷を背負つての帰り道、とある生垣の下に病気の仔猫が横たわっているのを見掛けた。貧しい女は可哀そうに思い、前掛けにくるむと、家へ持つて帰つた。途中彼女の二人の子どもが向こうからやつて来て、母親が何か持つてゐるのを見て、「母ちゃん、何持つてんの」と訊き、すぐに仔猫を抱こうとした。でも憐み深い女は、子どもたちが苦しめるかも、と心配して、仔猫を渡さず、家に着くと、柔らかい着物の上に寝かせ、乳ミルクを飲ませてやつた。これで元気づいた仔猫はやがて健康を取り戻し、ある日突然逃げ出して、姿を消してしまつた。しばらくして貧しい女がまたもや森へ行き、重い薪を担いでの帰り道、あの病気の仔猫が横たわつていたところに差し掛かると、そこに気高



い貴婦人が立っていて、貧しい女を手招きし、その前掛けに編み針を五本入れてくれた。女はどう考えたらいいやらよく分からなかったし、この風変わりな贈り物はどうもお軽少に思われた。でもまあ、もらった五本の編み針をその晩卓子テッブルの上に置いた。しかし、翌朝寢床を出たら、卓子テッブルの上に綺麗に編まれた靴下が一足あったのさ。貧しい女はおっそろしく訝いぶかしかったが、次の晩にもまた編み針を卓子テッブルの上に置いた。そしたら、朝にはその上に新しい靴下があったわけ。それで女は気付いたの。病気の仔猫を可哀そうに思った、そのご褒美としてこんな働き者の編み針を戴いたんだってね。それからというもの毎夜同じのを編んでもらい、とうとう自分も子どもたちももうこれで充分となった。やがて靴下を売りに出したけど、これは女に安らかな最期が訪れるまでたっぷりありましたよ。

解題

原題 *Das Kätschen und die Strichnadeln.*

### 三八 ちいぢやな卓子テーブル食事の仕度、驢馬ろば公踏こんぱうんばれ、棍棒こんぼう出て来い袋から

ある小さな町に実直な仕立て屋が家族ともども暮らしていた。頭数は五つ。父親、母親、三人の息子たち。息子は、両親ふたおやからも町の住民一同からも、洗礼名じゃあなくなつて、ただもうあつさり、のつぽ、太つちよ、とんま、つて呼ばれていた。年齢順でこう続く。のつぽは指物師さしものの、太つちよは粉挽こなきの、とんまは轆轤細工師ろくろの徒弟レアリシになつた。のつぽは、徒弟の年季が明けると、旅仕度をしてもらい、他国へ修行に遣わされることになり、上機嫌で大股にふるさとの町の市門から出て行つた。若者は長いことさまざまな土地を遍歴したが、仕事口を見つけることはできなかつた。それでなくなつてかつがつの路銀がとことん底をつきそうになるは、仕事や収入みいりにありつけそうな見込みはありやしないはで、悄然しやうぜんとして首をうなだれ、のろのろ道中を続けたもの。さて、折しも静かで美しい森に差し掛かり、しばらく中を歩いていると、小柄こで小でつぷりした男(80)に出逢つた。男はとても愛想良く挨拶して、立ち止まると、こう訊ねた。「これ、若い衆、いったいどこへ行かうというのかな。なんとも悲しそうな様子だが、いったいどうした。」「仕事(79)がねえんで」と若者は正直に言つた。「これがあつしの苦の種(81)でして——長いこと旅をして回つたんでござんすがね——もう金がありやしやせん。」「いったい、おぬし、手仕事は何ができる」と小人は更に問た質した。——「あつしは指物師(82)でさ。——」「おお、そんならわしと一緒に来るがいい」とちびすけは嬉しそつに叫んだ。「わしはおぬしに仕事をやるよ。あのな、わしはこの森に住んどののだ——そうとも、そうとも、さあさ、一緒においで、すぐ見えるでな」。そして百歩と離れていないところに一軒の綺麗な家があり、ぐるりにはぎつしり茂つた新緑の樅の樹の垣根が、まるで墨壁のように巡らされ、入り口の外には高く聳える二本の樅の樹が巨人の衛兵よろしく突つ立っていた。小人に中へ案内された指物職人はすぐさま憂鬱ゆううつとはおさらばして、人里離れた場所に住むこの親方の居心

地の良い部屋に満足しきった様子で足を踏み入れた。「ようおいでなされた」と部屋の一角の煖炉だんろの後ろから歳を喰った婆ばあ様が声を掛け、若者が背囊はいのうを下ろすのに手を貸そうと、ちよこちよこ歩み寄って来た。親方はその晩まだ随分長いこと若者とおしゃべりをし、婆様はいろいろな料理を並べ立て、小さい壺ティフルも卓子の上に置いたが、これには水とか弱麦酒ワフゼンなんぞよりずっとましなもの「上等の葡萄酒」が入っていた。若い指物師は師匠の



許での暮らしが大いに気に入った。やらねばならぬことは多過ぎないし、仕事に精を出し、それ以外でも真つ当で几帳面にふるまっていたれば、これっぽっちの文句も言われなかった。ところが何箇月か経つと、年取つた小人はこう言つた。「若い衆さんや、わしはもうこれ以上おぬしは要らぬでな、暇を出さやあならなくなつた。おぬしがわしのためにやつてくれた仕事の報酬に、金子を払つてやるわけにはいかん。だがの、いい形見をしんぜたい。これは金銀よりずっとおぬしの役に立つぞな」。そう言いながら世にも見事な造りのちいぢやな卓子を渡してくれ、なおもこう続けた。「この『ちいぢやな卓子食事の仕度』を据えてな、三度『ちいぢやな卓子食事の仕度』と唱えろとそのつど、これがおぬしの望み通りの食べ物と飲み物を食事に仕度してくれる。では達者でな、さらばじゃ。おぬしのお師匠さんを偲んでくれい」。これまで馴染んだ仕事場と別れたくなくて悲しかったが、それでも奇蹟を行なってくれるちいぢやな卓子を贈り主の手から受け取ると嬉しくて堪らず、若者は繰り返し繰り返し礼を言つて出立、懐かしのふるさと指してまたてくてく歩き出した。道中ちいぢやな卓子は、魔法の言葉で唱えるたびに、豊かな食事を提供してくれた。なにせたちどころに上上の料理と飛び切りの美酒がその上に並び、しかもそれらの容れ物は全部銀と来ている。中でも燦然と輝くのは雪のように真つ白な精緻極まる食食用具一式。言うまでもないが職人は「ちいぢやな卓子食事の仕度」を大事だいに扱ひ、故郷に着く前の最後の宿ではこれを旅籠の亭主に預けたくらい。でもその前にまるつきり飲み食ひしないのでその小さな卓子と一緒に部屋に閉じ籠つたので、亭主は板扉の隙間から覗き見をやらかし、かくして小さな卓子の秘密を発見した。だから、この小さな卓子を保管してくれ、と渡された時には殊の外喜び、その素晴らしい効能をしたたかに楽しんだ。全くもつてこの小さい机が気に入つたので、いかにも巧妙にこの可愛いのをせしめよう、と飲み食ひしながら考えに耽つた。で、思いついたのが、「ちいぢやな卓子食事の仕度」ではないけど、そつくりの小机があるじゃないか、つてこと。そこで狻猊亭主は真物の卓子を隠してしまい、贋物の別の机を翌朝職



人に手渡した。職人は何も疑わずにこれを背負い、浮き浮きとふるさとへと急いだ。家に戻るとのつぼの指物師は家族に喜んで挨拶、すぐさま父親にこの小机に纏わるたぐい稀な事情を打ち明けた。父親はひどく疑ったが、息子はそれを前に据え、三度「ちいぢやな卓子アヒル食事の仕度」と唱えた——けれども仕度してくれない。



で、実直な仕立て屋の親方が言うよう「このハンスのはかめが。おまえが他国に出掛けたのは、年取った親父をおちやらかすためだったのか。好い加減にしろ。物笑いになるまいぞ」。のつぽの指物師はさっぱりわけが分からなかった。どうして急にちいちゃな卓子テイルが妙ちきりんな具合になっちゃったんだろう。更にとあらゆることを試してみた。が、二度と食事の仕度をしてくれなかった。そこでこのつぽはまたまた鉤かんなを手を取って、けつめどが弾けるほど働かにならなんだ。

ところで太つちよの粉挽きだが、徒弟の年季が明けると、これまたやつぱり他国へ旅修行に出た。で、ご同様に同じ道中を辿り、例のあの同じちいさな小人に出くわし、雇ってもらって仕事をした。もともとの森の家は今度は水車小屋になってた。粉挽きの若い衆がしばらくの間、真つ当かつ信実、かつ精出して稼業に励んでいると、親方は一頭の恰好かつちう良い粉挽きライオン(87)を贈り物にして、こう言つた。「餞別はなむけの徴しるしにな、ま、ささやかな代物だが、これを受け取っておくれ。おぬしのやつてくれた仕事の報酬に金子を払うことができんが、これは金銀よりずつとおぬしの役に立つぞな。この驢馬(88)に、『驢馬公踏んばれ』と唱えるところのつど、これはドウカーテン金貨(89)を何枚も何枚も——くしゃみしてくれるぞなあ」。のつぽが道中「ちいちゃな卓子食事の仕度」と唱えたよりもまあもつとかな、太つちよは「驢馬公踏んばれ」と唱えたもの。すると驢馬は踏んばって、ちゃりんちゃりんばらばらつとドウカーテン金貨を撒き散らした。こりゃなんともかんともありがたいことだった——ぴかぴかの金貨つてのはね。——だけでも、粉挽き職人は大事な驢馬を連れて例のいかさま師で狡い亭主の旅籠に投宿、存分のご馳走を出してもらい、至れり尽くせりのもてなしを受けた。亭主に勘定を要求されると、「ちよつと待つておくれ。すぐ金を持つて来るからな」と言つたもの。食卓テーブル・クロスの掛け布を手にとると、厩うまやに行き、それを敷き藁の上に広げ、「驢馬公踏んばれ」と唱えたら、——もしたらね、驢馬は踏んばって、くしゃみをし、布の上にちりんちりんとドウカーテン金貨を落とす。厩の外には旅



籠の亭主が立っていて、扉の節穴から中を覗いて、一部始終を見届けた。確かに翌朝驢馬はいるにはいたけど、真物じゃなかった。太っちょは、騙されたなんてこれっぽっちも気付かず、明らかにこれにまたがり、とことこ旅を続けた。父親の許に戻ると、授かった幸運の話をし、家族一同が浮かれ騒いで驢馬の周りに立つと、「さ、皆の衆、よっ

くご覧じろ」と口上、驢馬に向き直って

「驢馬公踏んばれ」と唱えた。どこの馬の骨やら分からぬ驢馬っ子は、そりやるほど踏んばって、おんなじようなのを落つことしたけれど、これは金貨とは似ても似つかぬ代物だった。芸当をお目に掛けようとした太っちょは、観衆からどつと笑われ、野次り倒された。太っちょは驢馬をしたたかにつ叩いたが、ドウカテン金貨一枚叩き出せず、それからというもの、またしてもせつせと働き、額に汗して食い扶持を稼がにやらなんだ。

またぞろ一年過ぎ、とんまも徒弟奉公を辛抱し通し、頼もしい轆轤細工職人と



して他国へ修行に出た。二人の兄貴たちと同様せつせと働いて過ごしたものの、例のちいさな小人のところで仕事をさせてもらいたいな、と心から願っていた。兄貴たちの話では、この小人、手仕事でも学問でも知恵分別でも、ありとあらゆる分野に通曉していて、その上なんともすてきな贈り物をしてくれるってことだった。で、この轆轤細工職人もあの森の中で小人のぼつんと一軒建っている住まいを見つけ、あちらも、働きの若い衆だわい、と喜んで雇ってくれた。けれども数箇月経つとやっぱりこう言われた。「若い衆さんや、わしはこれ以上おぬしを置いてはられない。暇をやるでな」とね。別れる時に小人いわく「わしはおぬしに兄さんたち同様のいい形見をしんぜたい。だが、

何がおぬしの助けになるかの。兄さんたちはおぬしを、とんまと呼んどつたで。のつぼの兄者あにぢも、太つちよの兄者も、とんまぶりを發揮して授かり物をわやにしてしもうた。となると、いよいよ何がおぬしの助けになるかじゃて。したがこのなんてこともないような小袋を受け取るがええ。こりや随分と役に立ってくれようぞ。これに向かつて『棍棒出て来い袋ぶくろから』と唱えるところのつど——そのつどな、中に入つとる上手な轆轤細工の棍棒が飛び出して来て、徹底的におぬしを護つてくれる。で、おぬしが『棍棒入りな袋の中へ』と命じるまで、さんざんに殴りまくるのじゃ」。

轆轤細工職人は真底礼を言うと、もらった小袋を担いでふるさとを目指した。もつとも旅の途中護ってもらふ必要なんぞま



ずありはしなかった。心も軽く身も軽く道中している若者のこと、だれだって邪魔立てせずに先へ行かせたから。ある物乞い取締り役殿に、あるいは、どこの百姓屋敷からも飛び出して来て旅の衆に吠え掛かり、更には後ろからワンワンやらかす村の犬どもに、ほんの数回、袋の中身を味わわせてやりはしたが。さて、こんなあんばいでどうとうやって来たのが例の旅籠屋で、悪者の亭主が兄さんたちからその宝物を騙し取り、目下豪勢かつご満悦な暮らしの真つ最中。しかし、こやつはいまだに旅人の持ち物を巻き上げたてうずうずしていた。床に就く前に轆轤細工職人は亭主に例の袋を預け、いいかい、この小袋に向かって「棍棒出て来い袋から」って言葉を掛けちゃいけないよ、これには特別な事情があつて、だれでもそう唱えらると中の品物を背負い込むことになるから、と注意した。しかしながら、亭主はせしめた小机も驢馬つ子も全くもって気に入っていたから、この三番目の奇蹟を行う代物もやつぱりこつそり掠め取りたくて、客人が寝静まるのもほとんど待ちきれず、「棍棒出て来い袋から」とやらかした。その途端棍棒が飛び出し、太鼓の鼓手さながら亭主の背中をどんどこどこ連打し、殴って殴って殴り通し、茶色や青やの痣だらけに叩きまくったので、亭主はおつそろしい悲鳴を挙げ、わめきにわめいて轆轤細工職人



を呼び起こした。職人いわく「ご亭主、こりゃ当然の報いってもんだ。だから注意しといたろうが。あんた、おいらの兄貴たちから『ちいちゃな卓子食事の仕度』と『驢馬公踏んばれ』を盗んだな」。亭主は金切り声。「ああ、後生ですから助けておくんないわっしや殺されちまう」(なにしろその間も棍棒は亭主の背中中で休まず活躍していたからね)。「わっしやなにもかもお返ししますよう、小机も驢馬っ子も。ああ、ああ、ぶっ倒れて死んじまう」。

そこで職人が「棍棒入りな袋の中へ」と命じると、棍棒君はさつと袋に潜り込んだ。亭主は命拾いしたのが嬉しくて堪らず、ちいちゃな卓子テップルと驢馬公をほいほいと返却した。轆轤細工職人は一切合財纏めると、仕度を調べ、自分は驢馬にまたがって、故郷の小さい町目指して跑足たぐもしでたつたか進んだ。滅法界めっぽうかいに値打ちのある形見の贈り物が取り戻されたのを目の当たりにした兄さんたちは喜んだのなんの。以前と同様素晴らしい奇蹟をちゃんと披露した。

——取り戻してくれたのはこれまでしょっちゅう、このとんま、と罵っていた末の弟。弟は二人より利口だったわけ。そうして兄弟たちは両親の許でずつと暮らしたが、こつこつ働いて日日の糧かそを稼ぐ必要はもうなかった。だってそれからというもの、人生

に入り用な物は何でもかんでも充分たつぷりあったから。

解題  
原題 *Tischlein deck dich, Esel streck dich, Knüppel aus dem Sack.*

三九 ジーベンシェーン  
七重麗し

昔むかしある小さな村に貧しい夫婦者が住んでいた。持っていたのはちっぽけな小屋と一人娘。この子は素晴らしく綺麗で飛び切り気立てが好かった。働き者で、掃除、洗濯、糸紡ぎ、針仕事は七人前こなすし、七人ひつくるめたほどの美人だったので、<sup>ジーベンシェーン</sup>七重麗しと呼ばれた。でも、美しさをしょっちゅう人人に驚嘆されるので、<sup>は</sup>羞じらって、日曜日教会にお参りする折——だって<sup>ジーベンシェーン</sup>七重麗しはそんなじよそこの娘七人より信心深くもあり、これがこの子の最大の麗しさだった——はいつも顔を<sup>ヴェール</sup>面纱で覆っていた。こうした乙女をある時王子が見掛け、<sup>ちみ</sup>椗の若木のようにすらりとしたその典雅な姿、素晴らしい体つきに目を楽ませたが、<sup>ヴェール</sup>面纱に<sup>かき</sup>遮られて顔が見えないのが口惜しく、従者の一人にこう訊ねた。「どうしてわれら、<sup>ジーベンシェーン</sup>七重麗しの顔を見ることができぬのか」と。——「そのゆえと申しますのは」と従者。<sup>ジーベンシェーン</sup>七重麗しはそれほどに淑やかということでございます。これを聞いて王子「<sup>ジーベンシェーン</sup>七重麗しが美しいのに加えてさように淑やかなら、わたしは生涯愛を捧げ、結婚いたそうぞ。さあ、わたしのこの黄金の指環を





あれに持つて行き、こう申せ。話したいことがあるので、今宵あの大きなアイヒエの樹（96）の許に来てたもれ、とな」。従者は命じられた通りにした。七重麗（97）は、王子が自分に何か仕事を頼もうとしているのだ、と思い、大きなアイヒエの樹の許に行った。すると王子は、その淑徳の高さのゆえに乙女を愛しているの、妻に娶めとりたい、と告げたもの。けれども七重麗（98）はこう答えた。「私は貧乏な娘で、あなたはお金持ちの王子様。私ごときを妻にご所望あそばすと、お父君はともお怒りになられましよう」。でも王子はなお、どうしても承知して欲しい、と迫ったので、とうとう乙女は、考えさせてくださいまし、二、三日思案する時間を頂戴いたしとうございます、と言った。でも王子は二、三日なんて到底待たず、翌日にはもう七重麗（99）に一足の白銀の靴を贈り、もう一度アイヒエの樹の許に来てくれるよう頼ませた。そしてやって来た乙女にすぐさま、考えてくれたかどうか訊いたもの。乙女は、思案する時間はございませんでした、家のお仕事でやらねばならないことがとてもたくさんありますので、それになんと申しまして私は貧乏な娘で、あなたはお金持ちの王子様、あなたが、私ごときを妻にご所望あそばすと、お父君はともお怒りになられましよう、と返辞した。しかし王子が改めてますますやいのやいのとせがんだので、七重麗（100）は、きつとよく考えます、それから、王子様のご意向を両親に話します、と約束した。翌日になると、王子は乙女に一着の衣装を贈った。これは全部黄金の糸で織られていた。そしてまたまたアイヒエの樹の許に来てくれるよう頼ませた。七重麗（101）がそこへ来て、王子が再び訊ねたけれど、乙女はまたしてもこう言って嘆いたのだった。今度もお仕事が多過ぎて丸一日働かなければなりません、と、思案する時間はございませんでした、それからこのことについて両親と話すこともできませんでした、と。それからもう二度も王子に言ったことを繰り返したのだった。私は貧乏で、王子様はお金持ち、お父君を立腹させるだけですわ、と。そう言われても王子は告げた。さようなことは全て取るに足りない、どうしても妻になつて欲しい、そうすればいずれ王妃になろう、と。そこで乙女には、王子が自分のことをど

れほど誠実に考えているか分かったので、ようやく、はい、と答え、それからというもの毎晩アイヒエの樹の許に  
 いる王子のところへ通つて来た。王様にはまだ何もおっしゃらないで、と頼みはしたけれど。ところが宮廷には一人  
 の年取った醜い女家庭教師がいて、この女、王子の動静を窺い、秘密を探り当て、それを王にしゃべり立てた。王は  
 激怒し、従者たちを遣わし、七重麗しの両親が住んでいる小屋を火事にして、七重麗しを焼き殺そうとした。でも乙  
 女はそうはならなかった。火に気が付くと飛び出して、すぐさま水の涸れた井戸に入ったのだ。もつとも両親は、哀  
 れな老人たちは、小屋の中で焼け死んでしまった。

七重麗しは井戸の底に座つて嘆き悲しみ、泣きに泣いたけれども、長いこと井戸の底に留まっているわけには行か  
 なかったのだ、なんとか這い上がると、小屋の焼け跡からまだ使える品を見つけ出し、お金に換え、それで男物の衣  
 装を買い、ぴちぴちした男の子に変装、王宮に参上、召使にお雇いください、と言上した。王がこのうら若い従者に  
 名を訊くと、「薄倅ウシグリュックでございます」との返辞。王はこのうら若い従者が大層気に入ったので、ただちに召し抱え、  
 間もなく従者のだれよりもご蟲貞むいぎあそばすようになった。

王子は、七重麗しジューベンシエンの小屋が火事で焼けてしまった、と聞き、ひどく悲しみ、七重麗しジューベンシエンも一緒に焼け死んだ、としか  
 思わなかったし、王もやはりそう考えた。そこで王は、そろそろ息子をどこかの王女と結婚させよう、ともくろみ、  
 王子は近隣のある王の息女に申し込みをせざるをえなくなった。となると、宮廷人全部と従者全部が揃つて婚禮しんがりに赴  
 く必要があり、これは薄倅ウシグリュックにとつてなんとも悲しくて堪らず、胸に重石おもしを載せられたよう。行列の殿しんがりとなつて  
 馬を進めながら、澄んだ声を張り上げて遣る瀬無く歌つた。

『七重麗し』と呼ばれたが、

今じゃ『薄倅』が身に沁みる（88）

遠くからこれに耳にした王子はふと胸をつかれ、駒を控えてこう訊いた。「なんと、あのように綺麗な声で歌っておりましては何者でしょう。——「多分余の供をしているあの薄倅であろう」と王は答えた。「従者に召し抱えたのだ」。その時二人はもう一度唄声を聞いた。

『七重麗し』と呼ばれはしたが、

今じゃ『薄倅』が身に沁みる

そこで王子はもう一度、あれは本当に王の従者に間違いないのか、と訊ね、王は、そうだとしか思えない、と言った。

さて一行が新しい花嫁の城のごく近くまで来た時、またしてもあの綺麗な澄んだ唄声が響き渡った。

『七重麗し』と呼ばれはしたが、

今じゃ『薄倅』が身に沁みる

途端に王子は一瞬も躊躇せず、乗馬に拍車を掛けると行列の先頭から殿まで一介の士官のように疾駆して行き、



薄<sup>ウツク</sup>倅<sup>シヤク</sup>の許に着くと、すぐさま、  
七重麗<sup>シチヘウレイ</sup>しだ、と悟った。そこでにっ  
こり相手に頷<sup>うなず</sup>いておいて、またま  
た一行の先頭に急行、城に入った。  
さて、賓客の全てと供回りの全てが  
大広間に参集し、婚約の儀が執り行  
なわれることになった時、王子は將  
来の舅<sup>しゅうと</sup>に向かつてこう言った。  
「王様、ご息女の姫君と式典を挙げ  
ます前に、まずささやかな謎謎をお  
解きください。わたしは見事な箒<sup>たん</sup>  
筒<sup>す</sup>を一つ所持しております。しばら  
く以前これの鍵を紛失いたしました  
た。それゆえ新しい鍵を購<sup>あがな</sup>いまし  
てございます。ところがその後すぐ  
に元の鍵が出て参りました。さて、  
王様、お答えくださいまし、わたし  
はどちらの鍵を使用すべきでござ

「いましょう」。——「もちろんのこと、また元のをな」と王の返辞。「元のは大切にすべきでな。新しいのに譲ってはならぬ」。——「まさにさようでございます、王様」とすかさず王子。「わたしはご息女の姫君に求婚つかまつることはできませんが、お怒り召されますな。ご息女は新しい鍵、して元のはあれにおります」。そう言うなり、七重麗ジーベンシェーンしの手を取り、自分の父親の許に連れて行き、こう告げた。「さあ、父上、これこそわが花嫁です」。老王はいやもうびつくり仰天して叫んだ。「なんと息子や、これは余の従者の薄倅ウンクリユックではないか」。——大勢の宮廷人も声を挙げる。「あれあれ、あれは薄倅ウンクリユックにこそ」。——「いや」と王子。「これなるは薄倅ウンクリユックにあらざして、七重麗ジーベンシェーンし、わがいとしの花嫁なるぞ」。そして一座に別れを告げ、七重麗ジーベンシェーンしを奥方として自らのこの上もなく美しい城に連れて行った。

解題

原題 Siebensöhn.

「新しい鍵、元の鍵」というモチーフはしばしば用いられる。

## 四〇 三人の楽士

昔三人の楽士がふるさとを発つて他国へ出掛けたもんだ。三人とも同じ親方の許で徒弟レリアリツの年季奉公を終えたので、これからも相変わらず力を合せて知らぬ国で運試しをやらかそう、つてことになったわけ。さまざまな土地を愉快に遍歴して回り、教会堂開基祭⑩とか祝祭日とかの踊で伴奏、陽気な音曲の数数で、にぎにぎしいやらおとなしやかやらの拍手喝采を浴び、かてて加えてずつしり重たいバツツェン銀貨⑪を少なからずご祝儀に頂戴したしだい。さてこんなあんばいでとある小さな町に到着、その宵美しい音楽で皆の衆を悦ばせた。そのあげく演奏はひとまず止めにして一杯やり、ご返杯の数を重ねているうちに、お客のおしやべりにも加わった。いろいろ不思議な物語がこもこも交錯こまごましているうち、この町の近くにあるとかいう魔法の城が話題に上った。この城については



なんとも素晴らしいことも奇怪なことも夥しく語られた。あそこにとつてもない宝物が隠されてるだよ、とか、あそこにはいつも飛び切り上等の食べ物がいやってえほどたつぷり置いてある、それなのに人っ子一人住んどらん、と述べる者がいるかと思えば、また、あそこにはなんかのおつかない幽霊が出没するだ、と脅かす者も。せつかく白い背中を持ち込んだのが、それを茶色や青やの痣あざだらけにされちまって退散、しかも、宝物を掘り出したり、魔法を解いたりなんぞできずじまいだった、とも。こういったあれやこれやがその魔法に掛けられた城についてわいわい甲論乙駁。三人の楽士は、あてがわれた寝室でようやく仲間だけになると、長いこと額を集めて相談し、こう考えを取り纏めた。あの不可思議な城をもっと近くで検分しようや、いやいや、それっぱかりじゃなく、思い切つて中に入り、ひよつとしてひよつとしたら、あそこに隠されている魔法に掛けられた宝物を掘り出そう、とね。さて、一人ひとり別別に順番で断行する、それも年齢順で、それから、この冒険をやつてのけるためいめに丸一日提供しよう、と衆議一決。最初の運試しを引き当てたのは提琴ていけん弾ひき。これは勇氣凛凛りんりん、ぐずぐずしないで城に出発。で、そこに着いてみると、だれかが待ち構えてたみたいに入り口がもう開かれていますのを見。けれども、闕しきをまたいだ途端、背後で重い扉がどおんと閉まり、巨大な鉄の門かんとんががちゃんと飛び出した。生き物の影も見えなかったが、厳しい門番が職務を遂行、しっかり見張りをしているかのよう。——そこで提琴弾きはぞくぞくとして髪の毛つむじの上で逆立った。さはさりながら、引返すわけにもその場に留まっているわけにも行かない。それに、待望の好運、金貨や宝物のことを考えるとまた氣力が湧いた。階段を上がった下がり下がり、幾つもの素晴らしい部屋、壮麗な広間、居心地の良さそうな小部屋をうろつき回ったが——どこにもかしこにも絢爛豪華な用度がしつらえられており、この上もなく綺麗に手入れが行き届いていた。もつとも至るところしんと静まり返り、ごくちっぽけな蠅一匹すら棲みついていなかった。でも若者は改めて勇氣回復。ことに地階の部屋べや、厨房くりやとか穴蔵とかに足を向けたら。いと

珍奇で美味この上ない食糧品の蓄えがどつきりあつたし、数数の穴蔵には葡萄酒の壘が壁の上の方まで寝かされてい  
て、あらゆる種類の甘い砂糖漬けの果物を密封した大きな硝子容器がずらりと立っていた。綺麗で清潔な厨房には明  
るい火がばちばち親しげに燃えており、その上に目に見えない手が炙き肉用の鉄灸を置いた。それから選り抜きの  
猟獣肉が穴蔵から厨房に踊りながら入つて来て、鉄灸に載つかった。次いでその他の御馳走、極上の野菜料理や  
肉饅頭、頬つぺたが落ちそうな焼き菓子なども、目に見えぬ手によつて同様に手早く美味しく調理され、最も麗し  
い部屋べやの一つに若者が赴くと、その後からそこへ運び込まれ、若者が前にした掛け布の掛かつた食卓の上に並べ  
られた。若者はまず愛用の楽器を手に取り、その美しい旋律をしんとした部屋べやに朗朗と響かせ、それからお招き  
にあずかつた食膳に向かい、ぱくつき始めた。けれどもほどなく、部屋の扉が開き、一人の男の小人が入つて来た。  
背丈は三肘エレンボウケン 尺ほど、猩猩しょうじょうひ緋の短上着を一着に及び、小さな顔は萎びており、大きな銀製の靴の締め金にまで届  
く灰色の髻を生やしていた。この小人、黙りこくつて提琴弾きの傍に座り、一緒にむしゃむしゃやらかした。さて猷  
立が進んで例の見事な炙つた猟獣肉の出番になると、提琴弾きは皿を取り、お先にどうぞ、と会釈して合図した。  
すると小人はにつこりして一切れ肉フレイク又またに刺し、会釈を返したが、その折炙き肉を食卓の下に落とした。そこですぐさ  
ま親切に提琴弾きが背を屈め、それを拾い上げようとした。が、その途端髻の小人は背中に乗っかり、命の火を吹き  
消さんばかりに、情け容赦もなくしたたかにぶちのめした。提琴弾きの口も塞がれたので、とうとう若者はひっきり  
なしに殴られ続けながらあの大きな入り口から外へ押し出された。城の外で半死半生の提琴弾きはやつと息を吹き  
返し、仲間たちが残っている旅籠屋まで喘ぎながら這つて行つた。辿り着いた時はもう夜で例の二人はもう眠ってい  
た。翌朝仲間たちは提琴弾きが同じように寢床に横たわっているのを見つけてなんともびっくり、すぐさま質問攻め  
にした。けれどもこちらは頭と背中を搔くばかりでぶつきらぼうにこう返辞。「おまえら、まあ出掛けてつて自分で



見届けな。こりや痛し痒しつてな一件だからよ」。

さて今度は二人目の楽士の番、これは喇叭吹きだったが、魔法の城に足を踏み入れ、青痣だらけにされた提琴弾きと全く同じものを目の当たりにし、肉饅頭と打擲のもてなしを受け、その結果これもまた同様、くなくなく胴上げされた狐さながら翌朝寢床に転がって、「突拍子も無い演奏をされちまった、荒っぽい曲調でよ」とぼやいたもの。それにも拘わらず三人目の楽士、横笛吹きは勇氣凜凜、魔法の城へ運試しに赴いた。これが一番の利口者だった。平氣の平左で城中くまなくうろつき、こういった綺麗な部屋べやがこの先ずうつとこちらのものになればなんと楽しい限りだ、と考えたもの。それに厨房と穴蔵にはなにしろ食料の蓄えがどっさりあったしね。間もなく横笛吹きのためにも珍味佳肴を盛った食卓が調えられた。若者は氣の済むまで長いこと朗らかに歌ったり笛を吹いたりして部屋の中を歩き回ってから、腰を下ろし、楽しく味わった。するとまたしても例の髯の小人が入って来て、客人の傍に座り込んだ。恐れを知らない楽士はこれを相手におしゃべりを始め、まるでここで百遍も顔を合わせたみたいにふるまったが、小人はあんまり話好きじゃなかった。さてまたまた炙き肉の出番になり、またまた小人がわざと肉切れを下へ落とした。横笛吹きは親切に拾い上げてやろうとしたが、まさにその時、このちっぼけな侏儒が自分の背中に跳び乗ろうとしたのに氣付いた。すぐさまばつと身をかかわして、こちらから襲い掛かり、むしゃぶりつくと、小人の髯を引っ掴んで猛烈に揺さぶったので、とうとう髯がすっかりすっぽ抜けた。すると爺さん小人は呻きながら崩折れてしまった。一方若者は両手に髯を握った途端、法外な力がどつと体に溢れて来て、城の中に素晴らしい物が数数あるのが前よりずつとずつとたくさん目に見えた。これに反して小人はどうやらすっかり生氣を失くしてしまい、ひいひい泣いてこう哀願。「返せ、わしの髯を返してくれ。返してくればこの城を支配しとる魔法を全部おぬしに教え、手を貸して魔法を解いてしんぜよう。そうすりゃおぬし、お蔭で金持ちになり、いつまでも幸せになろうによ」。だが賢

い横笛吹きはこう返答した。「あんたの髻を返してもやろうがな、だが、その前に——前にだぞ、なにもかもぼくに教えなくっちゃいけない。でなきゃあんたは悪党だ。そうしないうちはこの髻、手離すこっちゃない」。そこで爺さんは、致しかたなくまず自分のした約束を果たさざるをえなかった。ほんとはそんな気はなく、狡く立ち回って髻を取り戻したかったのだが。こうして若者は小人の後に随ついて幾つもの暗い通路、丸天井の地下の穴蔵、ぞつとするような巖の裂け目を通り抜けなければならなかったが、とうとう頭上の開けた広広した野原に出た。これは全くの話、こちらよりずっと麗しい世界のように思われた。と、河の畔ほとりに来たが、これは轟轟ごうごうと荒れ狂っていた。しかし小人が小さな杖を取り出して水を叩くと、波浪はすぐさま二つに分かれ、兩人が足を濡らさず向こう岸に渡るまでそのまま静かにしていた。いやさて、向こう岸の素晴らしいことといったら。更に青葉の茂る壮麗な木の下蔭したかげを辿り続けると、どこにもかしこにも花花が咲き乱れ、金銀の羽の小鳥たちが妙たえなる唄を歌い、きらきら輝く甲虫や蝶ちようちようが辺りをひらひら舞い飛び、優美な動物たちが茂みや生垣で遊び戯れていた。頭上の空は青くはなく、純金の光輪のように光り輝き、星星はずっと大きくて、複雑もつに纏もつれ合う舞踏さながら互いに交錯して旋回していた。

若者は驚嘆した。でも年老いた侏儒ツツメルグにあの不思議な城よりもととずつと絢爛豪華な館に連れ込まれた時の驚きはこんなものではなかった。この館の中でも壮麗さとともに深沈たる静寂がどの部屋べやをも支配していた。そうした数多くの部屋をくまなく歩き、やがて薄物の帳とじりですつかり囲まれているその一つに足を踏み入れた。部屋の中にはやはり帳で厚く覆われた寝台があり、その上には見事な鳥籠がぶら下がっていて、中にいる一羽の小鳥が明るい囀さえずりで静寂を震わせていた。年老いた小人は寝台の周りの帳を掲げ、若者をもっと近くに寄せた。若者が黄金きんの総ふさが幾つも垂れ下がっている柔らかな絹の褥しとねの上に見たのは、すやすやと眠っている世にも愛らしい乙女だった。その姿は天使のよう、純白の肌着を纏い、胸と両の肩には黄金の巻き毛が波打っており、頭には金剛石ダイヤモンドの冠がきらめ



ていた。けれど死にも似た眠りがその穏やかな表情を虜囚とりこにしており、どんな物音でも典雅な眠れる乙女を目覚めさせることはできなかった。すると小人は讚嘆しきっている若者に向かってこう告げた。「ここで眠っているこの子だがな、これはある高貴な姫君なのだ。この見事な城とこの恵まれた国はこの子の相続領となる。魔法が解かれた暁には、ということだが。したが、何百年も前から深い魔睡まぐみに昏昏と眠っておるし、何百年も前からここへ通ずる道を見つけた人間はおらぬ。わしだけがこの道を往来して、わしの住まいのかしこのあの城で食事をし、黄金欲しやに浮かされた連中が現われると、棍棒料理をふるまって参ったのだ。わしはこの眠れる乙女の番人でな、余所者がここに闖入ちんにやうせぬよう周到に見張りをせねばならなかった。わしの髻むすはそのために授けられたもの。それには途方もない力が籠められておるので、わしもやはり何百年も前からこの魔法を使いこなすことができたのだ。だがの、髻むすが奪り取られた今となつてはわしは無力になつてし

まい、優雅な姫君とともによみがえ甦るこの限りない幸運をおぬしに見つけさせ、引き渡さねばならぬのだ。されば、魔法から解放する手立てに急いで取り掛かるがよからう。姫君の上に下がっているこの籠の鳥を捉まえるのだ。この鳥はな、その昔歌って姫君を魔睡に引き込み、以来ああした唄を絶えず囀り続けにやならんでおる。これを捉まえ、殺してしまえ。そして小さい心臓を抉り出し、それを燃やして粉にせい。そしてその粉を姫君の口中に注ぐのだ。さすれば姫君はたちどころに目を覚まし、その手もその心も、その領土もその城も、それからその財宝一切合財ひつくるめておぬしに捧げてくれようぞ」。そして小人は精根尽きて口をつぐみ、若者の方は即刻解放の仕事始めた。手早くそして手際よく、なにもかも爺さん小人の指図通りにやり、粉の仕度をした。それを服のませてものの数分も経たないうちに、姫君は爽やかに微笑みながら目を開き、臥床ふしどから身を起こし、幸せに酔った若者の胸にぐつたりと抱かれ、愛を囁きながら感謝し、妹背いもせの契りを誓った。その瞬間城中にどろどろばりばりという音が轟とどろき渡り、どの階段にも足音が響き、どの部屋もざわざわと騒がしくなった。やがて従僕と侍女の群がにこやかな顔を揃えて幸せな二人の居室に入つて来た。だれもが喜色満面で、それからびちびち活き活きと幾つもの厨房、酒蔵、大小の部屋べや、通路にすつ飛んで行つて、めいめいの仕事に取り掛かった。全員まるで生まれ変わったよう。

ちっぽけな爺さん侏儒ツッパルカは、髻を返してくれ、と若者にやいのやいのとせつつき、陰險な胸の裡うちで、この幸運児に悪さを働いてやろう、ともくろんでいた。なにしろ、こやつの頸に元通り髻がくつついたたら、死すべき定めの人の子を打ち拉ひげる力の持ち主になるからで。しかし利口な笛吹きは腹黒い小人に相変わらず用心をおこたらず、こう告げた。「ああ、あんたの髻は返してやるとも、心配しなさんな。別れる時に渡すよ。が、済まないけど、ほくら二人に、ほくの可愛い花嫁とほくとに、ちよつとの間あんたを送らせて欲しいんだ」。小人はこれを拒むことはできなかった。そこで三人は美しい木の下蔭と花園を通つて小人と同行、とうとう例のおっそろしく深い、轟轟と流れる河の畔に出

た。これは姫君の領地を取り囲んで何哩マイルも何哩も流れており、いわば国境線となっていた。ぐるり一帯、人間が対岸に渡れるような橋一つ、小舟いっせう一艘ありはしない。大胆不敵な泳ぎ手だつてやり抜けなかつたろう。なにせ、波浪が激しく荒れ狂っていたから。若者が小人に言うよう「あんたのあの杖を貸してよ、今度ははくがあんたのために河水を二つに分けてあげるから」。小人は髻びせの力が戻っていないものだから、いやがおうでも相手の言うことを聴かねばならなかったが、心中密ひそかにほくそえみながらこう考えた。やつが河の向こうでわしに髻を渡したら、やつを思うがままにして、杖を取り返し、二人とも連中の世にも素晴らしい国に戻れなくしてやるわい、とね。でも侏儒ツヴェルクの陰險な企みはこううまくは行かなかつた。利口で幸運な若者が杖で水を打ち、水がさつと分かれて動かなくなると、小人が先立ちで向こう岸に渡つた。するとその背後で波浪がまたくつついて逆巻いた。ところが若者はいとしい花嫁とこちら側に残り、杖を手にしたままで、髻びせだけ河の向こうへ投げたもの。そこで小人はあちらでそれを受け留め、また顎にくつつけた。くつつけはしたが、爺さん、魔法の杖を騙し取られてしまったので、その後絶対にこの美うまし国に足を踏み入れることは許されなかつた。さて、幸せな若者は愛らしい妻とともにまた城へ、喜びと至福の絶えない地へ帰つて行つた。仲間二人の許に取つて返したいなんて気持ちにはこれっぽかりも湧かなかつた。朋輩たちは長いこと旅籠屋に滞在していたが、若者が二度と現われなかつたので、いわく「ありやあ笛吹きに行つちまつたんだ」<sup>(15)</sup>。——以来これが諺ことわざになつた。だれかが、あるいは何かが、それつきりになつちやつた時のね。

解題

原題

*Die drei Muskhanten.*

四一 粉挽きと女の水の精

原題 *Der Miller und die Nixe.*

KHM一八一「池の女の水の精」Die Nixe im Teichに相当するため訳出せず。

訳注

- (1) ヴァルター・シエルフ Walter Schert. 一九二〇年マインツ(現ラインラント・プファルツ州)に生まれる。児童文学・昔話研究者。  
 (2) ハンス・イェルク・ウター Hans-Jörg Uther. 一九四四年北ドイツのヘルツベルク・アム・ハルツ(現ニーダーザクセン州)に生まれる。文芸学者・口承文芸研究者。ゲッティンゲンの『昔話百科事典』*Enzyklopädie des Märchens* 編集スタッフ上級メンバー。ATU編纂者。Md W前編纂者。KHM(一九九六、二〇〇四)、『ハウフ昔話集』(一九九九)、DMB(一八五七版)・NDMB(一九九八)などの校訂編纂(いずれもMdWシリーズの一卷)を出版。その他業績は夥しい。

三三 ベっぴんさんの花嫁御寮

- (3) どけ行く、どけ行く、羽根袋どん、／ベっぴんさんの花嫁御寮はいったい何を(して)よ Wahn, wahn, Herr Federsack? / Was macht die schöne junge Braut?  
 (4) あの子はうち中掃除して、／窓から外を眺めているでしょ Sie fegt und säubert unser Haus / Und schaut wohl auch zum Fenster heraus!  
 (5) やあ、(き)げんよう、ベっぴんさんの花嫁御寮、／嬉しそにおらうちを眺めてるだな Gruß Gott, o schöne junge Braut, / Die freundlich uns entgegenlacht  
 (6) あはよ、道中(に)無事でな、ベっぴんさんの花嫁御寮、／女を信用するなんてとんちき間抜けも(い)い(と)よ Fahr wohl, du schöne junge Braut! / Ein Tor ist, wer auf Weiber baut!

二四 七羽の鴉

- (7) するとすぐさま……姿を消した 母親が魔術を心得ていたのではない。言葉には力があり、祝福や呪詛はそれ相当の効能を表す、とかつては

いずれの地、いずれの民族においても信じられていた。今でも程度の差こそあれ、そうした信仰は残っているのではあるまいか。

- (8) 煖炉の中には……載っていた「煖炉」と訳した「オーフェン」Ofen は（日本の「囲炉裏」と同様、暖房用でもあったし、料理用でもあった。自在鉤に吊るした湯沸かしで湯を沸かしたり、鍋で煮物をここと煮たり、焼き串で魚や肉片を焼いたりしたのである。またヨーロッパでは、料理が冷めないように煖炉の内側に設えた棚や腰掛けに置いておくこともできた。ここではそれを指している。なお、火を完全に囲い込んだ調理用ストーヴや天火への移行は、ヨーロッパにおいては十八世紀以降徐徐に進んだようだ。都市部では入手が困難になった薪や木炭から、供給無限——と思われた——の石炭に燃料がかわり始めたため。臭い硫黄の蒸気を出す石炭だと、開放型の煖炉の直火では料理に不向きだったので。(9) 処刑された哀れな罪びとの死骸を喰わなきゃならなかったんだ。町外れの小高い丘の上や街道筋に立てられた絞首架に罪人が吊るされ、見せしめのため、ばらばらになって下に落ちるまで風に揺られるままぶら下がり、鴉どもにつつかれている、という陰惨な光景は、中・近世ヨーロッパを舞台にした物語にしばしば描かれている。

- (10) 新居の最初の奉献式 des neuen Hauses erste Weihe. 「奉献式」Weihe は教会が建立された時行なわれる浄めの儀式である。

## 二五 婚礼の客お三方

- (11) 百姓屋敷に飼われている犬が三匹 dr. v. Hohnunde. 大きな農園を経営している農夫は、数人、あるいは十数人の男女の使用人を雇い、牛、馬、豚、羊、鶏、鶯鳥など家畜・家禽もたくさん飼育、広大な屋敷（母屋、使用人の住む長屋、納屋、脱穀場、厩舎、鳥小屋、その他付帯施設、井戸のある中庭から成る）を持っていた。ここで「ホーフ」Hof というのはそれである。江戸時代の日本語「百姓屋敷」に相当。
- (12) すこく schart. 味にも状態にも用いられる形容詞・副詞。
- (13) 熱い heiß. 温度にも状態にも用いられる形容詞・副詞。
- (14) ぼろぼろ mürbe. 焼き菓子の柔らかい状態も指すが、「無気力な」「うちひしがれた」「くたくたの」という意にもなる。
- (15) だがの、毛を置いて来にゃ「手痛い目に遭わにゃ」aber Haare lassen muß einer können. Haare lassen müssen は「商売などで」手痛い目に遭う」という意味の慣用句。しかし、直訳すると「毛を置いて来なければならない」となる。このわん公、可哀そうに、実際、毛を置いて来たわけ。
- (16) 掛け汁 Brühe. 煮たりした煮出汁。フランス語の「ブイヨン」bouillon に当たる。普通はスープのことだが、肉や鳥の料理に掛けられるグレイヴィ・ソースのこともいう。ここでは、哀れなわん公にぶっ掛けられたのだから、こう訳しておいた。

## 二六 涙の小壺

(17) 御(ご)変(へん)容(よう)のキリストのように麗(麗)しかった schon wie in Verkürzung. イエス・キリストの「変容」(英語 the Transfiguration)は、その神性の顕現(顕現)に theophanie の一場面として、特に東方正教会(ロシア正教会など)で重要な意味を持っている。ロシアの都市ノヴゴロドの聖画像や中世ロシア最大の聖画像画家アンドレイ・ルブリョフに描かれた図が名高い。東方正教会ではこの祝祭日を「顕栄祭」(八月一日)。カトリック教会での祝日「変容祝日」は八月六日」という。カトリック教会でこれを主題とした絵画としては、ヴァティカン美術館にあるサンツィオ・ラッファエッロの遺作『変容』(Trasfigurazione) (一五一八—二〇)が有名。画面全体が暗いのに対し、山上から飛翔するさまのキリストは、光り輝いて見える。前記聖画像では宙に浮いてはいないようだが。「変容」は、新約聖書マタイ伝十七章一九節、特に二節、マルコ伝九章二—八節、特に二—三節、ルカ伝九章二十八—三十六節、特に二十九節で述べられている。「斯(あ)で彼らの前にて其の状(すがた)は、其の顔は日のごとく輝き、その衣は光のごとく白くなりぬ」(マタイ伝十七章二節)。

## 二七 雌鶏ちゃん(めんど)と雄鶏ちゃん(おんど)の話

(18) 胡桃(くるみ)の実 私(わたし)たちが店で見掛ける胡桃(くるみ)は、固い殻に覆われた脂っこい白い物(仁(じん) 胚乳(はいにゅう) だけど、あれは胡桃(くるみ)の実の核(こ)だ。梅干(うめ)で言えば普通(ふつう)しゃぶってほきますあれです。秋に熟した胡桃(くるみ)の実(み)は柔らかい果肉に包まれています、これは流水に浸したりして腐らせて除去し、核(こ)だけにします。しかし、六月頃の未成熟の胡桃(くるみ) (青胡桃(あおくるみ))の果肉はもつと豊かなので食用になります。ドイツでは酢漬(ピクルス)けにしたり、ある種のリキユール(リキユール)の原料にします。日本では、たとえば、秋田県角館(かどかね) (仙北市角館町)の郷土料理「若胡桃(わがくるみ)の味噌漬(みそづけ)」。鶏(けい)たちもつづけば案(あん)に食べられるこ(こ)うした果肉が目的(め)だったので、雌鶏(めんど)ちゃん(めんど)が丸呑(まるの)みしたので大騒動(だいそうどう)です。

(19) 花冠(はなかんむり) Kranz 銀梅花(ぎんめい)の花冠(かんむり)。銀梅花(ぎんめい)の枝を編んで拵(か)えた花環(はなわん)。純潔(じゆんけつ)の象徴(しやうてい)として花嫁(はなよめ)の冠(かんむり)に用(もち)いる。ただ、泉(いずみ)がなぜ花冠(かんむり)を欲(ほ)しがるのか分(わ)からない。泉(いずみ) Brunnen はドイツ語(ドイツ語)では男性(おとこ)名詞(なご)だし。

(20) 軛(くみ) Deichsel 牛(うし)や馬(うま)など動物(どうぶつ)に牽(ひ)かせる車(くるま)から前に長く突き出た二本(にほん)の棒(ぼう)。その両端(りやうたん)に軛(くみ)を渡(わた)し、動物(どうぶつ)を繋(つな)いで牽(ひ)かせる。

(21) しなの木(きの) Linde 以前(いぜん)は「菩提樹(ぼだいじゆ)」と訳(わけ)された、ドイツ語(ドイツ語)圏(けん)お馴染(なじみ)みのあの樹木(じゆもく)。

(22) お狐(きつね)さんがくたばった Der Fuchs ist mausetot 直訳(ちやくやく)すれば「狐(きつね)が鼠(ねずみ)のように死(し)んだ」狐(きつね)が完全(てんぜん)に死(し)んだ。「二十日鼠(にじゅうにちねずみ) Mäuschen のせいで死(し)んだ」と掛(か)けているのだが、うまく訳(わけ)せません。

## 二八 穀物の穂

(23) いと高き処(ところ)には栄光(えいこう)、神(かみ)にあれ。地(ち)には平和(へいわ)、なべての人人(ひと)の間に優(やさ)しみと祝福(しゆくふく)と愛(あい)のあれかし Ehre sei Gott in der Höhe, Friede auf



Erden und unter allen Menschen Wohlwollen, Segnung und Liebe. 新約聖書ルカ福音第二章十四節に「いと高き処には榮光、神にあれ。地には平和、主の喜び給ふ人にあれ」Ehre sei Gott in der Höhe, Friede auf Erden und den Menschen ein Wohlgefallen! (ルター訳ドイツ語聖書による)とある。これはキリストの誕生を「寿ぐ天使に、天の軍勢が加わって、神を讚美した時の詞」。

## 二九 兎と狐

(24) 切り詰め所帯つてやつ Durhof. 「デュルホーフ」とはしみつたれか貧しいかで、ろくすっぽ食べる物もない所帯のこと。

(25) 丸麴麴 Semmel. (ライ麦、その他の雑穀を混ぜたりしないで) 小麦の粉だけで拵えた上等の小型の丸い白パン。皮が固いが中味は柔らかい。「焼き立てのゼンメルのように売れる」Abgehen wie warme Semmeln は「飛びように売れる」「とても需要が多い」の意の慣用句。「ゼンメル」は南ドイツ・オーストリアでの呼称。他地方ではプレーチェン Brötchen と云う。

## 三〇 勇ましい横笛吹き

(26) 横笛吹き Föhenspieler. 横笛奏者。「フレーテ」Flöte (笛) はおそらく最古の木管楽器。ドイツでは横笛Querflöte (Flauto traverso) が普通だったので、「横笛」と訳した。

(27) 借地契約人 Pachter. 王侯や大修道院のような大領主から土地の賃貸契約をしている農民。普通「小作人」と邦訳されるが、かつての我が国の小作農のように経済的貧困と結び付けられる階層ではない。英国の「テナント」tenant に当たる。ちなみに、莊園領主の家臣として莊園管理に当たる者は「マイアー」Meier (「莊司」「庄司」)であり、それが差配する農園が「マイアーホーフ」で、これが「莊園」に相当する。

(28) ほんの近くに古いお城がある In kurzer Entfernung: eine alte Burg. おそらくこの城は、借地契約人が経営している農園とは街道を隔てた小高い巖山の上にあるのであろう。

(29) 扁豆 Linsen. 「あじまめ」「レンズ豆」。凸レンズのような形の豆。疑いもなく地中海域諸国原産で、古代エジプトで既によく知られており、ヘブライ人の間では食料として重要な役割を果たしていた。旧約聖書創世記二十五章二十九―三十四節に、アブラハムの子イサクの長子エサウが空腹のあまり弟のヤコブに、ヤコブが煮ていた「扁豆の羹」つまりレンズ豆のシチューを分けてもらう代わりに長子権を譲ってしまうくだりがある。古代ギリシア人やローマ人における消費量は高く、とりわけ人口の大半を占める貧困層にとって大切な食べ物だった。もともと現代ドイツの料理書では、レンズ豆の料理(サラダなど)は敏感な胃の持ち主にはどうも感心しないと悪口を言う向きも。ただ、これは水に長いこと漬けておかなくてもすぐ煮える、という利点を持つ。フランスではルイ十四世の時代には見向きもされなくなり、家畜の飼料にされたとか。ドイツの昔話によく登場するのは、ドイツ語圏が豊かな農業国フランスに較べ貧しかったことを物語っているようか。

(30) クロイツァー銅貨 Kreuzer. 十三世紀に铸造された時には小さいが銀貨だった。しかし、十五世紀以降南ドイツとオーストリアハンガリアで補助貨幣として用いられる銅貨となった。一八四〇年のバイエルン王国では六十クロイツァーで一グルデン。DMBが発行された一八五七年、南ドイツにおいてはだが、一ターラーは一七五グルデンに相当したとか。この計算だと一ターラーは一〇五クロイツァーになる。十九世紀ドイツ語圏ではグルデン、ターラーともに大きいけれども銀貨。だから、クロイツァー銅貨の価値はさほどではない。二―四枚で子どものお駄賃といったところか。

### 三一 兎番と王女

(31) それを受け留めて 婿選びの乙女が楼門のような高いところから毬を投げて、たまたまそれが当たった男性を婿とするという、はなはだ昔話的な習俗(ヨーロッパに本当にあったかどうか未詳)を思い起こさせる。これはトルコの民話「毛皮娘」(我が国の御伽草子の「鉢かづき」ペローの「驢馬皮」Peau d'âne、KHM六五「千匹皮」Allerhand)の類話)にあるし、『西遊記』の始まり近く、やがて三蔵法師の父母となる若い男女の馴れ初めの場面にも登場する。唐代中国では実在存在した習俗。

(32) うっとりするよな羊飼いの一刻「甘い愛の一刻」 eine süße Schäferstunde. 暖かく物憂い昼下がりが、おとなしい羊の群は放っておいて涼しい木蔭で恋人といちゃいちゃしようとしてにじり寄り寄り寄る牧人が、ラファエル前派のウイリアム・ホルマン・ハント(一八二七―一九一〇)の絵「雇われ羊飼い」William Holman Hunt: The Hiring Shepherdに描かれているでしょう。ま、あれのちょいと後刻の情景でも考えればよろしかろう。リヒターの挿絵は上手ですね。

(33) 驢馬の尻尾の下 むきつけに申さば、驢馬の尻の穴。

(34) 豌豆 Erbsen. 若い莢が莢豌豆、新鮮な未熟の豌豆が美食家に喜ばれるいわゆるグリーンピースだが、この場合はもちろん完全に熟した豆を乾したものである。古代エジプト人、ギリシア人、ローマ人に既に人気のある食材だった。十九世紀末に消化の良くない皮を取り除く方法が考案され、現代ではもはやこうして処理された乾豌豆しか食材とされないようだ。

(35) マース Maß. ドイツ語圏南部の古い液量単位。地方により異なるが、一―二リッター。

(36) 扁豆 Linzen. DMB三〇「勇ましい横笛吹き」訳注「扁豆」参照。

### 三二 月の中の男の昔話

(37) 大事な日曜日 日曜日はキリスト教徒にとっては安息日(イスラム教では金曜日。ユダヤ教では土曜日)。聖なる日と定められ、仕事を休んで礼拝を行なう。

(38) 背負い梯子 Staiselstook. 「シユタツフェルシユトック」の決まった訳語および形状は不明。粗朶の束などを括りつけて運ぶという用途がこれと類似している日本の民具がある。その東京都下多摩地方の用語を当ててみた。「背負い梯子」は木製の梯子状で長さ一メートルほど、幅は成人の背中の幅程度。担げるように肩掛け布が両脇に付いている。

(39) 第三の戒め モーセの十戒の第三。「安息日を憶えてこれを聖潔すべし。六日の間勞きて汝の一切の業を為べし。七日は汝の神エホバの安息なれば何の業務をも為すべからず。汝も汝の子息息女も汝の僕婢も汝の家畜も汝の門の中にをる他國の人も然り。其はエホバ六日の中に天と地と海と其等の中のもの一切の物を作りて第七日に息みたればなり。是をもてエホバ安息日を祝ひて聖日としたまふ」（旧約聖書出エジプト記二十章八—十一節）。

(40) 月の中には薪束を背負った男が立っている 月面の染みは民族によつてさまざまな図柄に解釈されている。そしてそれぞれに伝承がくついている。

### 三三 風呂屋の国王

(41) 南国語を話す者たちの weischer Zunge. 「ヴェルシユ（イタリア語、フランス語、イスパニア語などロマンス語）の舌の」。実際、ハプスブルク家出身の神聖ローマ帝国（ドイツ語圏諸邦は名義上に過ぎなくとも概ね帝国領）皇帝カール五世（在位一五二〇—一五六）はイスパニア国王カールロス一世（在位一五一六—一五六）でもあり、イタリアのナポリ王国（当時イスパニア王国領）をも治めていた。

(42) 晩課 Vesper. カトリックで日没時に行われる礼拝。晩禱。普通楽器の演奏や聖歌の合唱など音楽を伴った。

(43) デポジット・ポテンテス・デ・セデ・エト・エクサルタウィト・フミレス DEPOSIT POTENTES DE SEDE, ET EXALTAVIT HUMILIS. ラテン語。小文字混じりにすれば Deposit potentes de sede, et exaltavit humiles. 新約聖書ルカ伝一章五十二節、ごわゆるトニフイカートのなかのテキスト。ウルガタ聖書 (Vulgate 訳) そのまま。ただし、前後に亘る長い文の一部で、五十二節自体には動詞の主語は含まれていない。主語として一番近いところにあるものをあげると、四十九節の qui potens est 「力ある者」というのが直訳、文語訳では「全能者」。時制は完了形。この時制上のニュアンスは次の訳注に出した文語訳には出ていないし、ルターのドイツ語訳では現在時制になっている。(44) 主なる神は、権勢ある者を座位より下し、卑しき者を高うす Gott der Herr wirft die Mächtigen vom Throne, und erhebet die Niedrigen. 新約聖書ルカ伝一章五十二節「権勢ある者を座位より下し、卑しき者を高うす」が出典。ルター訳ドイツ語聖書では次の通り。Er stößt die Gewaltigen vom Stuhl und erhebt die Niedrigen.

(45) 浴場に出掛けた in ein Bad sang. 王侯ともあろうものが、町中の風呂屋に出掛けた、という設定は奇妙に思えるが、そこが昔話か。もっとも、古代ローマでは元老院議員でさえ公衆浴場を愛用した。また、いわゆる五賢帝の一人ハドリアヌスは自分が建造させた公衆浴場に時折

出掛けて、一般庶民と裸のつきあいをしたことが、『羅馬皇帝伝』Historia Augusta（筆者不明）の逸話のみそである。四世紀から五世紀への世紀転換期あたりに記されたと思いきやラテン語の同書では、「皇帝と庶民との裸のつきあい」自体を不自然とは考えていない。中世ヨーロッパの都市にも、数はおそらく同時代のイスラム圏の大都市には遥かに及ばなかった（二一八四年当時、衰退したアッバース朝の首都バグダードでも、約二〇〇〇〇ある、と町の長老の一人が述べた、と『イブン・シュバイルの旅行記』〈講談社学術文庫、二〇〇九〉）と思われるもの、公衆浴場があった。一説に、一三四八年以降黒死病が繰り返しヨーロッパを襲うようになると激減した、というが、たとえば、シュヴァーベン有数の都市ウルムには一四八九年（当時の住民数は不明。ただし大いに栄えた十六世紀頃にはほぼ二万一千にも達した）一六八の浴場があり、蒸し風呂（十二世紀のヨーロッパで既に一般的だった）を提供していたとか。普通、理髪師兼外科医が浴場経営者。浴場主の理髪師は、男性客の髪を刈り、髻を剃り、場合によってはその他の箇所の手毛などをしたほか、蛭やメスや特殊な器具を用いて刺絡（濁血）もした。風呂には蒸し風呂と桶湯風呂双方があった（鉱泉、温泉についてはまた別）。

(46) アホラシア Narragonia. ナラゴニア。「阿呆」「道化」の意の「ナル」Narをもとに国名めかしくした造語。

(47) 王を拳骨でたこぶり按摩してやめた salbe den König mit Faustöl. 直訳すれば「王に拳骨という油を塗り込んだ」。蒸し風呂、桶湯風呂、冷水浴、垢擦りなどで充分に体を清めたあと、流し場の木の台に裸のままうつ伏せになって浴場の使用人にマッサージさせ、オリブ油やクリームなどを塗り込んでもらうのが湯上りの最後の仕上げ。ま、この国王、ただ木の長椅子で涼んでいたかったのかも知れないが。

(48) すっぽんぼんの丸裸 nackt und bloß. ルートヴィヒ・リヒターの挿絵ではこの通り腰の回りは包んでいる。しかし、古代ギリシア・ローマや中世イスラム諸国、中世ヨーロッパの浴場の流し場では男性は普通全裸だったはず。まあ、この場合、そんな風には描けなかったかな。

(49) こけ苛めよろしく後を追って掛ける die ihm aber nachlaufen, wie einem Torn. 「愚者であるかのように彼の後を追いつけて来る」。精神障害者や知的障害者を大勢で付け回してからかい、愉しむ連中がいたわけである。

(50) 酔人 Schenk. 掌酒子。食事の折主君たる王侯貴族に酒を注ぐ係。毒見役でもあったろう。それなら、最も信頼のおける近臣だった、と思われ。

(51) 小昼時過ぎ nach der Zeit des Mittagsimbisses. 「ミッタークスインビェス」Mittagsimbiss は「軽い昼食」。

(52) 傲慢不遜 Hofahrt. この物語では、二回同じ綴りでの語が用いられているが、現代の綴りは Hofart。発音は同じ。

(53) 神はその思し召す者を高うし、また卑うせらるる Gott erhöht und erniedrigt, wen er will. 「凡そおのれを高うする者は卑うせられ、己を卑うする者は高うせらるるなり」（マタイ伝二十三章十二節）からか。

(54) 甘美なる方、力ある方、キリストに讃えあれ Gelobt sei der süße Christ, der Gewaltige, der Gewaltige, der Gewaltige, der Gewaltige. 「君主」「主権者」などの語は避けた。俗界を髣髴させて、柔和なキリストに相応しくあるまいから。

三四 ちびっこの親指ごぞう

- (55) 丸麴麴 Semmel. D M B 二九「兎と狐」訳注「丸麴麴」参照。
- (56) 籠編みの材料の柳 die Weide... aus denen man Körbe flicht. 「コルプヴァイデ」(籠柳) Korbweide (学名サリクス・ウィミナリス・リンネ *Salix viminalis* L.) のこと。非常に強靱な枝を持つ二―四メートルの灌木。ヨーロッパと北アジアに分布。枝は物を縛ったり、籠を編んだりするの用にられる。
- (57) 骨皮筋右衛門が料理人頭になった。ist Schmalhans ..... Kuchenneister. 「シュマルハンス」Schmalhans は「がりがりの瘠せっぽち」。直訳「瘠せっぽちが料理人頭になった」。「貧乏神が台所を取り仕切った」てなところ。
- (58) 酒蔵主任 Kellermeister. 「ケラー」Keller は地下の穴蔵。壺詰め食品や獣獣肉もだが、特にワインやビールの樽、壺を貯蔵しておく冷暗所。ここでは後者の用途が強調されている。「ケラーマイスター」Kellermeister はその管理者。
- (59) 良い知恵ってなかなか浮かばないもの。Guter Rat ist teuer. 直訳すると「良い助言は安くない」。
- (60) 人喰い男 Menschenfresser. D M B 二四「黄金の牡ののる鹿」訳注「人喰い男」参照。
- (61) 白楊の葉っぱ Erlenlaub. 「エスベ」Espe は「ツイッターバツベル」Zitterpappel (震えるポプラ、箱柳) とも。二〇―二五メートルに達する落葉喬木。滑らかな灰緑色の樹皮。成育した樹では菱形で滑らかな、そよぎ易い葉を付ける。ヨーロッパ一円、日本、北アフリカにも分布。ドイツ語圏では「白楊の葉のように震える」が「ぶるぶる震える」の形容として慣用句となっている。D M B 一六「胡桃の小枝」訳注四八「白楊」をも参照。
- (62) 寝間帽子 Nachtmütze. Nachthaube とも。寝る時に被る柔らかい生地のできた先の尖った縁無し帽。今はあまり用いられない。
- (63) さあ、あの餓鬼どもの仕度をしてやんな Gel und richte die Krabben zu. zurchten には「仕度をする」「仕上げをする」の他に「料理する」の意もある。もちろん、食べ物に当たる語を目的語とする文脈においてだ。
- (64) 七哩靴 Siebenmeilenstiefeln. はあてね、これを履いて一歩歩くと、七哩(約一・二キロ)進む靴だ、と思うが。それから Stiefel は「長靴」である。L・リヒターの挿絵では普通の短靴。これも、はてな、である。なお、この挿絵で親指ごぞうが携えているのは、急使が持つ鞭。
- (65) 一哩 eine Meile. 約一・六キロ。
- (66) 運勢を切り開いた hat ... sein Glück gemacht. 諸国の王侯貴族に仕える急使をやって身を立てたようである。いやいや、そんじょそこらの大公や公爵あたりではなく、教皇や神聖ローマ帝国皇帝、イスパニア国王、フランス国王、英国国王、ロシア皇帝、それどころか、異教徒のトルコ大帝にさえ奉仕したかも。

## 三五 魔法試合

(67) 製本屋の職人 Buchbindergeselle. 印刷職人が印刷した紙を裁断し、綴じ、表紙を付ける、一連の作業に携わる職人。装訂職人。装訂は、製本の仕上げ裝飾、すなわち書籍の体裁美を調える仕事。

(68) 親方 Meister. 職匠。手工業組合（北部ドイツではギルド、中部ドイツではイヌンク、南西部ドイツではツンプト）の組合員。手仕事を身に付けようとする少年と年季契約を結び、徒弟「Lingling」として一定期間修行させる資格を有する。年季奉公を終えて一定の職人試験に合格した者が職人 Geselle。これは元の親方の許を離れ、自由意志で各地の親方のところに住み込み、伎倆に磨きを掛ける。これが旅行期間「Wanderjahre」の物語の主人公である若者は旅行行中だったのである。

(69) 袖珍本 Büchlein. 小型の本。

(70) 牡牛 Ochse. これは犁の先に繋いでの耕作用、場合によっては牛車を牽引させるための力の強い使役獣としてヨーロッパで大いに需要があった去勢した牡牛。時として極めて兇暴になる種牛ではない。体はとも大きい、鈍く、のっそりしているというイメージなので、そうした型の男をも「牡牛」と称した。すなわち「牡牛」はヨーロッパでは「のろまな大男」の代名詞でもある。

(71) ……様子になった gebährdete. gebärden = gebärden の過去形。

(72) 威張りんぼの雄鶏 ein stolzer Gückelhahn. 現代の綴りでは Gückelhahn. 雄鶏は数羽、あるいは十数羽の雌鶏たちに君臨し、百姓屋敷の中心の堆肥の山の上などで、毎朝誇らかに刻を作るので、偉ぶっている威張りんぼと決まっている。

## 三六 オータと蛇

(73) 糸繰車 Spinnrad. 亜麻や羊毛（日本では繭まゆや綿）などから繊維を引き出したり、その繊維を纏まとわせて糸にしたりするのに用いる車。

この導入によりヨーロッパでは古代ギリシア以来の伝統技法である、糸の原料を巻き付けた糸巻棒と紡錘つむぎをそれぞれ手に持って紡ぐ熟練が必要な製糸をせずに済むようになった（とは言うものの、ドイツ語圏の田舎では一九二〇年代頃なお糸巻棒と紡錘つむぎを用いての糸紡ぎは行なわれていたが）。糸車、紡ぎ車。DMB四二「金髪さん」訳注「紡錘」をも参照。

(74) 糸巻棒 Weile. 紡いだ糸を巻き取る棒。軸があり、回転するようになっている。糸棒。

## 三七 仔猫と編み針

- 三八 ちいぢやな卓子<sup>テイデル</sup>食事の仕度、驢馬<sup>ロフ</sup>公踏<sup>コウチウ</sup>んばれ、棍棒<sup>コンボウ</sup>出て来い袋から
- (75) のつば、太<sup>タ</sup>ぢよ、とんま der Lange, der Dicke, der Dumme.
- (76) 指物師<sup>サシモノシ</sup> Schreiner. 日本語の「指物」とは木の板を指し合わせて組み立てた家具や器具（箱、机、筆筒<sup>テウソウ</sup>など）のこと。この細工をする手工業者が「指物師」。ドイツ語「シュライン」Schreinは「箱」「戸棚」の意。「シュライナー」はこれを作る人。
- (77) 粉挽きMiller: DMB二〇「つろころと丸ごころ二人の粉挽き」訳注「粉挽き」参照。
- (78) 轆轤細工師<sup>ワケモノシ</sup> Drechsler. 「轆轤」とは丸い挽き物を作る工具。これを用いて、木材、角、象牙、海泡石、大理石、雪華石<sup>アラバスター</sup>膏<sup>カウ</sup>などを挽き、日用品や芸術作品を細工する手工業者がドイツ語圏の「轆轤細工師」。
- (79) 徒弟<sup>シヤシヤシ</sup>になった 原文ではただ「なった」wurdeとあるだけ。しかし、これに続く「のつば」の話でも分かるように、まずそれぞれの親方の許に徒弟として年季奉公をし、それから職人として旅行に出るのを許され、最後に親方としての技能試験に合格して手工業組合から親方として認定されないと、「指物師」「粉挽き」「轆轤細工師」とは名乗れない。そこで言葉を補った。なお、職人となった兄弟は、稼業は何か、と訊かれると、それぞれ「指物師」「粉挽き」「轆轤細工師」と答えているので、これはそのままにしておいた。DMB三五「魔法試合」訳注「親方」参照。
- (80) 小柄<sup>コハゲ</sup>で小でつぷりした男 ein kleiner, etwas wohlbeleibter Mann. これだけでは「リヒター」描く挿絵の人物びつたりなのだが、実はこの男、ドイツ語圏の昔話でお馴染みの「小人」Männchen, Männleinなのである。挿絵では「のつば」と較べてそう差はないけれど。三兄弟全てが同じ小人の恩恵に浴する。「小人」といってもさして小さくないのもいるのであって、DMB四〇「三人の楽士」では一六〇センチ近くの背丈と思われる「小人」が登場する。同訳注「三肘尺」参照。
- (81) 背囊<sup>ハイザク</sup> Felleisen. 旅行用の職人が担いだ旅行用のリュックサック、ランドセル。歩兵の装具でもあった。
- (82) 弱麦酒<sup>コフツバイト</sup> Kowent. Kowentとや「デュンビア」薄<sup>ボウ</sup>ズール Dumberの方言。「修道院ビール」Kowent, Kowent-bierの意。修道院<sup>コフツベイト</sup>（ラテン語「コンウエントゥム」〈集合名〉conventumを語源とする古フランス語conventから転訛したcovent → Kowent）の修道士たちに飲み物として供与された薄く弱いビールが語源。英語の「スモール・ビール」small beer「スモール・エール」small aleに当たる。とにかく、渴きを癒すだけの飲料であって水代わりに過ぎない。もともと、清潔でない生水がしばしば疾病誘発の原因となった中、近世ヨーロッパでは飲料として愛好された——いかなるビールも麦芽からの醸造課程で水を加熱するので細菌が死滅するからである。アルコール度が低い（二％以下）ので子どもにも与えられたし、朝食の際にも飲まれた<sup>モルト</sup>。修道院や一般家庭で自家製された（大抵はホップを入れずに）のだが、後にはビール醸造所で、強いビール（＝濃いビールDickbier）を醸造した使用済みの残り汁（ほとんど、あるいは全く麦芽成分を含まないマツシユ）を再び加熱して作られるようになった。「デュンビア」「スモール・ビール」「スモール・エール」は、修道士、水兵、水夫、召使、庶民の飲み物として、

- 西欧中・近世の、および、中・近世を舞台とした文学に登場する。DMB一五「痲癩筋の話」訳注「弱麦酒」をも参照。
- (83) ちいぢやな卓子（た）食事の仕度 Tischlein deck dich その前では Tischlein deck dich となっている。意味は同じだが。
- (84) 食事用具一式 Tischgedeck ナイフ、フォーク、スプーン、皿、カップなど。
- (85) おぢやらかす lutzen 「愚弄する」「からかう」「foppen」。
- (86) けつめじが弾けるほど daß die Schwarte knackte. 直訳「皮膚がぱちんと裂けるほど」。
- (87) 粉挽きライオン Müllerlöwe. 穀物とてきた製品である粉の搬入・搬出に必要な駄獣として、丈夫で力があり、餌もそう要らない驢馬が粉挽き小屋には付き物。これを「粉挽きライオン」と呼んだとは知らなかった。この語は『グリュムドイツ語辞典』には見当たらない。
- (88) 驢馬公踏んばれ Eselen strecke dich. 物語のタイトルは Esel streck dich である。ついでに縮小語尾「ライン」-lein が付いている。
- (89) ドゥッカーテン金貨 Dukaten. イタリア語「ドゥカート」ducat. 古くから金貨が流通していた東ローマ帝国やイスラム諸国との貿易で栄えたヴェネツィア共和国で二二八年鑄造された高純度の金貨がその名の発祥。貨幣に刻印された銘の最後の字 ducat に因む。ヴェネツィアやフイレンツェから北方へ広まり、ハンガリアやボヘミアでも鑄造されるようになった（たとえばブラークヒンブルハ近郊の金鉱山オイレエの金で作った「オイレンドゥッカーテン」Eulendukaten）。十六世紀半ばには約三・四グラムの金が含有されていたらしい（慶長小判の金含有量は一五・一グラム強）。ちなみにヨーロッパ初の金貨は一二五二年フイレンツェ共和国で鑄造された「フィオリノ」Florino（総重量約三・五四グラム。金の含有比率は不明）。これがドイツ語圏でグルデン金貨 Goldgulden と後に称される貨幣。
- (90) くしゃみしてくれる niesen. シヤルル・ペローの『過ぎし昔の物語あるいはお伽話、ならびに教訓』またの名『鴛鳥おばさんのお伽話』（二六九七）Charles Perrault: *Les Histoires ou Contes du temps passé. Avec Moralitez (= Moralités) / Contes de ma mère l'Oye (= l'Oie)* (= いわゆる「ペローお伽話・「スロー童話」の「驢馬皮」Peau d'âne（現代の綴りでは Peau d'Ane）冒頭に登場する驢馬は金銀貨を「くる」(糞する)のである。KH M三六「お膳や御飯の仕度、金貨驢馬、棍棒袋から出る」Tischchen deck dich. Goldesel und Knüttel aus dem Sack では、「ブリックレフレット」と声を掛けられると、金貨驢馬は「後さからも前からも金貨を吐き出す」Gold zu speien von hinten und vorn がペロー型が本来民話に登場する金貨を出す驢馬の遣り方であろう。
- (91) おんなじようなのを落っこしたけれど、これは金貨とは似ても似つかぬ代物だった was selbiges fallen ließ, das waren nichts weniger als Goldstücke. これで、「くしゃみする」というのが実は、婉曲な表現だ、ということが分かる。落としたのは黄色い糞。
- (92) 棍棒出て来い袋から Knüttel aus dem Sack!
- (93) 棍棒入りな袋の中へ Knüttel in den Sack!
- (94) ある物乞い取締り役殿は einem gestrengen Herrn Bettelvoigt. 「ズツテルフォークト」Bettelvoigt は物乞いや貧民などの取締まり・救護に



当たった都市、町村の下級役人の古い呼称。町で物乞いしようとした貧しい女性を「ベッテルフォークト」が禁じようとした例がある。どうい  
う職掌だったか推して知るべしであろう。「アルメンフォークト」Armenvogt（貧民救護役人）、「アルメンクネヒト」Armenknecht（貧民救護  
下役）とも。strenger Herr は役人に対する昔風の呼び掛け。「殿」様。中世ヨーロッパにおいては、教会が物乞いや貧民の救済に当たって  
いたが、近世以降これは都市や町村、更には国家の仕事となった。

三九 七重麗し

(95) 七重麗し Siebenschan. 「七分美しい」。

(96) アイヒエの樹 Eiche. 英語「オーク」oak。樺科の落葉樹。日本の「栢」（周囲約二メートル、高さ約八メートル）「水栢」などに似ている  
が遙かに大木となる。周囲が一〇メートル近くの木や、高さ三メートルに及ぶ木がある。材は堅牢で木目が美しいので家具の材料として好ま  
れる。木造船時代のヨーロッパでは優れた造船用材（最上とされたのは「オーク」、すなわち英国産。これはしばしば「英国樫」と邦訳され  
る）とされた。鈍鋸歯状の大きな葉を付ける。いわゆる団栗の一つであるその果実（堅果）「アイヒエル」Eichelはかつて森に放牧された豚の  
群の絶好の食餌となった。豚は秋にこれをたつぷり食べて肥え、晩秋につぶされて冬季の備蓄食肉に加工された。全ヨーロッパに見られ、とり  
わけドイツにはライン河下流域の中部ドイツ平原には極めて美しいアイヒエの森がある。巷間伝えられるように樹齢二〇〇〇年にも及ぶものが  
あったかどうかは疑わしいが、一〇〇〇年くらいか、と類推されるものがドイツに現存するほど長命であり、ずんぐりとした幹から太枝を周囲  
に伸ばした巨木は珍しくない。

(97) 薄倅 Unglück. 「不幸」「悲運」。

(98) 『七重麗し』と呼ばれはしたが、／＼今じゃ『薄倅』が身に沁みる Siebenschan war ich genannt / Unglück ist mir jetzt bekannt.

四〇 三人の楽士

(99) 教会堂開基祭 Kirnstag. DMB二〇「ごろごろと丸っこい二人の粉挽き」訳注「教会堂開基祭」参照。

(100) バツェン銀貨 Batzen. 十五世紀末スイスのベルンで初めて鑄造された。ベルンの紋章の熊BEI BÄRENの模様が付いているのでこの名が  
ある。一バツェンはクロイツァー銅貨四枚に相当。

(101) 提琴弾き Geiger. ヴァイオリン奏者。

(102) 炙き肉用の鉄灸 Bratrost. 肉を炙るための焼き網。

(103) 選り抜きの猟獣肉が穴蔵から ヨーロッパ人の好む狩猟の獲物のうち大型の野獣である猪や鹿の肉が、熟成するようにひんやりした穴蔵で吊

るされていたのである。

- (104) 肉饅頭 Pastrate. 捏ね粉で外皮を作り、卵を塗って光沢を出し、中に脂肪、野菜、香辛料とともに肉類、魚介類を入れて、天火で焼いた料理。フランス語「パテ」pate、英語「パイ」pie。果物入りのパイはドイツ語圏では厳密には「トルテ」「Orte」と呼ばれるようだ（海貝トルテ）Marintorte のような例外はあるが。

- (105) 男の小人 Männlein. 「マン」男 Mann + 縮小語尾「ライン」lein。

- (106) 肘尺 drei Ellenbogen. 「エレンボーゲン」「Ellbogen」は普通「肘」のこと。こゝでは極めて古い時代（古代エジプト王朝など）からの尺度の単位である成人男性の肘から中指の先端までの長さ。「肘尺」ではなく「肘尺」と訳したのは訳者が嚙矢か。ラテン語「クビトゥム」cubitum. 英語「キュービット」cubit（二七—二一インチ＝四五—五六センチ。「キュービット」は普通「腕尺」と邦訳されるが疑問。「腕尺」であれば腕の付け根から中指の先端までの寸法となるのではあるまいか）。ドイツ語圏ではこの尺度を「エレ」Ellеという。最も短いフランクフルト・エレで五四—七三センチ、最も長いバイエルン・エレで八三—三三センチ（ちなみに、英語「エル」el は肩から手首までの長さ——仕立て屋の寸法取りでの尺度——なので、これとは大いに異なる）。しかし口承文芸での肘尺はそうした公の長さではなく、まあ五〇センチちょっと考えてよいか（これだと、この小人、一六〇センチ近くの背丈になってしまいが）。小人は、親指くらい、とか、一掌幅尺 Hand（一〇センチほど）程度の大きさというのもあるが、人間と対等につきあう連中はあんまり小さくないようだ。大層力が強いのだとしい。

- (107) 痛し痒しついな一件 eine kitzliche Sache. 「キッツリヒ」kitzlich は「くすぐりたい」の他に「微妙な」の意もある。提琴弾きは、仲間二人も自分と同じ目に遭えばいい、と思ひ、鞆晒して二重の意味を持つ表現を使っているわけ。背中や打ち身が痒いものの、掻けば痛いから、城での経験はまさに「キッツリヒ」（痛し痒し）で、それを「微妙な」「難しい」と受け取るのは仲間の勝手。

- (108) 喇叭吹き Trompeter. トランペット奏者。

- (109) ぐなくなくに胴上げされた狐 ein geprellter Fuchs. 古くは、狐狩りで捕らえた狐を扱げた布の上に乗せ、何度も何度も高く抛り上げて殺す、という風習があった。

- (110) 横笛吹き Flötenspieler. D M B 三〇「勇ましい横笛吹き」訳注「横笛吹き」参照。

- (111) ちっばけな侏儒 Zwergelein. 初めて「ツヴェルク」Zweg + 縮小語尾「ライン」lein の形でドイツ語圏の民間伝承に登場する超自然的形態の「小人」「侏儒」に当たるドイツ語が使われている。これは英語の dwarf に当たる。通常丘の中など地下に住み、金属を精錬、宝石を掘り出して、見事な装飾品や刀剣を作る。容姿醜く、魔法の心得がある。古英語 dweorg、古代北欧語 dwergr、に遡るが、語源はよく分からない。古代北欧叙事詩『エッダ』によれば、原初の巨人ユミルの屍骸に生まれた蛆のような存在である、とのこと。地下の自然力の人格化であ

ろう。短軀なのは勿論だが、頭が胴体に較べて大きく、手は長くて頑丈、といったところか。伝説では人間嫌いだが、KHMなど昔話<sup>メヒルゼン</sup>では主人公の性格が気に入ると同情して助けてくれる親切な存在であることが多い。KHMの場合に限るが、全く性悪な小人が出る稀な例は、KHM一六一「雪白<sup>ゆきしろ</sup>と薔薇赤<sup>ばらあか</sup>」Schneeweißchen und Rosenrotのみ。他に、魔物あるいは魔法使いの手下として門番役・監視役を務める、なるほど善良とは決して申せぬ力の強い小人がKHM九一「地下<sup>エルトメネン</sup>の小人」Der Erdmannkeken（この物語の類話）に登場するが、これはまあ脇役で、しかも全く邪な存在とは断定しきれない。

(112)「ありやあ笛吹きに行つちまつたんだ」。Der ist flöten gegangen。慣用句「笛吹きに行く」flöten sehenは、「行方不明になる」「消え失せる」「駄目になる」という意味。ドイツ語の慣用句に関して夙に定評のあるルツ・レーリヒ編著『諺的慣用句事典』Lutz Röhrich: Lexikon der sprachtypischen Redensartenに拠れば、議論の多い慣用句で、発祥の由来はまだまだにはつきり解明されていない、とのこと。でも、この物語をお読みになった皆さんには、もう語源は明白白ですよね。さよう、こういうわけなんです。

#### 四一 粉挽きと女の水の精

### 結びに一言。

DMB（一八五七）は全部で八〇編の昔話<sup>メヒルゼン</sup>から成っているのですが、今回の「試訳（その三）」でやっとこさつとこ半ばまで漕ぎ付けたわけ。もつとも、KHMとほぼ同じ内容なので、訳出を控えたものもこれまで既に少なからずある。ほぼ同じ内容とは申せ、ベヒシュタインの場合表現がKHMとは随分異なるので、これらも折を見てご紹介申し上げたいのはやまやま。が、とにかくDMBの全貌を一応把握するのが当面の急務だ、と思っている。今後とも武蔵大学人文学会のご厚意に甘え、この仕事を「人文学会雑誌」に発表させて戴く所存。あと二年あれば、訳出を控えたものを含め全ての試訳を、それからこれまで形ばかりだった解題の充足を成就できようかと、どこかで鬼が二匹くらい捧腹絶倒しそうなもくろみでいる。

今回もよく分からないことが幾つか。しかし訳者の才覚ではなんとしても不明の箇所は、いずれもその分野に通暁している方にお伺いを立てることができて、つくづくありがたかった。二六「涙の小壺」の訳注「御変容ごへんようのキリストのように麗しかった」では、カトリック坂出教会さかいで（香川県）司祭土屋和彦尊師と人文学部ヨーロッパ比較文化学科の同僚香川檀教授のご高教に与った。土屋尊師には三三「風呂屋の国王」の訳注「甘美なる方、力ある方、キリストに讃えあれ」の訳語でもまことに肯綮に当たたるご示唆を戴き、いちいち頓悟した。ただし、その他類出するキリスト教関係の訳注では、聖務ご多忙の御身にご相談するのがいくらなんでも憚られたので、これらは全て訳者の専断で解釈、訳語を選んだことをお断りしておく。また、同じく三三「風呂屋の国王」の訳注「デポジット・ポテンテス・デ・セデ・エト・エクサルタウイト・フミレス」では、青山学院大学文学部フランス文学科の西村哲一教授から、ラテン語テキストについて極めて詳細なご教示を賜った。にも関わらず訳注に記載させて戴いたのはその一部に過ぎないことをお詫び申し上げる。尤も、この場合に限らず、さまざまな方面から貴重なご示唆・ご教示を戴いても、そっくりそのまま訳注に反映させることがなかったことがほとんど。言わずもがなのことではあるが、訳責はこれまでも今後とも全て鈴木一個に帰せられる。

土屋さん、香川さん、西村さん、どうもありがとうございました。

なお本稿は、同じく鈴木満訳・注・解題「ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ昔話集』（一八五七）訳注（その一）」（『人文学会雑誌』第四〇巻第四号、二〇〇九・三月）、訳注（その二）」（『人文学会雑誌』第四一巻第一号、二〇〇九・七月）と共に、西村淳子武蔵大学人文学部教授を代表とする武蔵大学総合研究所プロジェクト「ヨーロッパ人の外国語力格差と日本における多言語多文化教育」の一環となる「昔話メルヘンないし語りの言語教育的効果」考察に

寄与する研究である。試訳は、本稿である（その三）（「人文学会雑誌」第四一卷第二号、二〇〇九・十一月発行）に次いで、（その四）（「人文学会雑誌」第四一卷第三・四合併号、二〇一〇・三月発行予定）、（その五）（「人文学会雑誌」第四二巻第一号、二〇一〇・七月発行予定）と継続する予定で、（その一）、（その二）を併せ全体としてこの研究を構成する。当該プロジェクトにご高配を戴いた関係各位および諸機関に深甚な謝意を表するしだいである。

この拙い訳稿を平成二十（二〇〇八）年師走に逝去された敬愛する宮本袈裟雄教授に謹んで捧げる。平成十七（二〇〇五）年三月発展的解消を遂げるまで人文学部比較文化学科において宮本さんとともに過ごした春秋については、言うに言われぬ思いが今にある。宮本さんは、平成十（一九九八）年四月学科創設の折、当時の日本文化学科から移籍なさったが、訳者も当時の欧米文化学科ドイツ文化専攻課程から移籍した。宮本さんは比較文化学科初代教務委員で、訳者は初代研究委員だった。

宮本さん、どうか、どうか、安らかにお休みください。それにしても、学内行政と無縁の特任教授に、ほくみたいに早くからなっていればどんなにかよかったですらうね。